

令和7年度
全国学力・学習状況調査
鹿児島県結果分析



令和7年11月
鹿児島県教育委員会

はじめに

令和7年4月に令和7年度全国学力・学習状況調査が実施されました。本調査は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における教育指導の充実や学習状況の改善に役立てることを目的として実施されており、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立するための重要な手段でもあります。

これまでの調査結果から、本県の児童生徒の学力は小学校では概ね全国水準にある一方、中学校、特に数学に関して課題が指摘されています。学力の3要素に基づいて分析された結果からは、「知識及び技能」を活用して考える力、根拠をもって自分の考えを説明する力などの「思考力・判断力・表現力等」において、改善の余地が見られます。また、学習を振り返り、次の学びへとつなげる力、自己肯定感や学習意欲の低さ、他者と考えを共有しながら学ぶ姿勢に関しても改善の必要性が示唆されており、「学びに向かう力・人間性等」に関わる側面として、引き続き改善を進めていく必要があります。

本報告書は、令和7年度全国学力・学習状況調査の結果に基づき、全国的な傾向と本県の実態を整理し、今後の教育施策及び授業改善の方向性を明らかにすることを目的として作成しています。調査結果から本県の学力や学習状況の実態を丁寧に分析し、課題や改善策を提案しています。

各市町村教育委員会及び各学校においては、今回の調査結果を分析し、成果や課題等を明らかにするとともに、教育指導の充実や学習状況の改善につなげてください。そのためには、単純に平均正答数などの差のみをもって評価するのではなく、児童生徒個々の誤答傾向や学習状況、標準偏差や中央値、分布の状況などと合わせて総合的に結果の分析等を行うとともに、それぞれの教科や学年にとどまらず、学校全体や近隣の小・中学校等で課題を共有し、これまでの授業実践や指導法等を振り返るとともに、どのような取組が成果を更に伸ばし、課題克服につながるのかを深く追究し、今後の改善策を具体的に検討してください。

これからの社会を生き抜いていく児童生徒に、「知識及び技能」，「思考力・判断力・表現力等」，「学びに向かう力・人間性等」の学力の3要素をバランスよく育成することは、私たち教育者の使命であると考えます。

県教育委員会としても、児童生徒の「確かな学力」の向上とその定着に向けて努めてまいりますので、各市町村教育委員会及び各学校におかれましても、本報告書も活用しながら、引き続き、児童生徒の「確かな学力」の向上と定着が図られるよう取組をお願いします。

I 調査の概要	1
(1) 調査の目的	1
(2) 調査実施日	1
(3) 調査対象	1
(4) 調査事項	1
(5) 調査問題	1
(6) 今年度の調査の特徴	1
2 学力調査の結果概要	2
(1) 小学校6年 平均正答数・平均正答率	2
(2) 中学校3年 平均正答数・平均正答率・IRTスコア	2
(3) 無解答率	2
3 教科別、観点別及び領域別の結果概要	3
(1) 小学校国語	3
(2) 中学校国語	6
(3) 小学校算数	11
(4) 中学校数学	14
(5) 小学校理科	19
(6) 中学校理科	21
4 質問調査の結果概要	23
(1) 令和7年度児童生徒質問調査の結果（抜粋）	23
(2) 児童生徒質問経年推移（抜粋）	25
(3) 同一集団における回答状況の比較	27
5 クロス集計による結果概要及び分析	29
(1) 学力調査との相関	29
(2) 授業理解と学び方の関係	30
(3) 「主体的・対話的で深い学び」と「主体的な学習の調整」の関係	31
(4) 「主体的・対話的で深い学び」に関する児童生徒と教師の意識	34

6 指導法改善のポイント	36
(1) 国語【小学校第6学年】	36
(2) 国語【中学校第3学年】	39
(3) 算数【小学校第6学年】	42
(4) 数学【中学校第3学年】	44
(5) 理科【小学校第6学年】	47
(6) 理科【中学校第3学年】	49
 (参考資料) 令和7年度全国学力・学習状況調査 質問調査結果概要	55
(1) 児童質問調査【小学校】の結果概要	55
(2) 生徒質問調査【中学校】の結果概要	58
(3) 学校質問調査【小学校】の結果概要	61
(4) 学校質問調査【中学校】の結果概要	64

本報告書で使用している言葉について

・ IRT (項目反応理論)

児童生徒の正答・誤答が問題の特性(難易度, 測定精度)によるものか, 児童生徒の学力によるのかを区分して分析し, 児童生徒の学力スコアを推定する統計理論(詳細は 22 ページに記載)

・ IRTスコア

IRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し, 500 を基準にした得点を表したもの

・ IRTバンド

IRTスコアを1~5の5段階に区切ったもので, 3を基準のバンドとし, 5が最も高いバンドとなる

・ 最頻値

データの中で最も出てくる値

・ 中央値

データを大きさの順で並べたとき, ちょうど中央に位置する値

・ 標準偏差

データの散らばりの大きさ(ばらつき)を表し, 標準偏差の値が小さいほど, データが平均の近くに集まっていることを表す。

・ 全国四分位

全国の児童生徒の正答数分布の状況を, 概ね 25%ずつになるように区切って, 4つの層に分類したもの

・ パーセンタイル値

データを大きさの順で並べたとき, 下から何%の位置にあるかを示す値。

・ SES

家庭の社会経済的背景。全国学力・学習状況調査では児童生徒質問調査「家にある本の冊数」をSESの代替指数として利用している。

(低SESグループ:0~25冊, 中SESグループ:26~100冊, 高SESグループ:101冊以上)

Ⅰ 調査の概要

(1) 調査の目的

- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- 学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善策を確立する。

(2) 調査実施日

令和7年4月17日(木)

※ 中学校理科については、オンライン方式で4月14日(月)～4月17日(木)に実施

(3) 調査対象

本県の公立学校の

- ① 小学校第6学年の全児童
小学校455校 12,920人
- ② 中学校第3学年の全生徒
中学校213校 12,804人

※ 本報告書における数値は、全国及び本県の公立学校の結果である。

(4) 調査事項

- ① 児童生徒：教科調査〔国語、算数・数学、理科〕 / 質問調査
- ② 学 校：質問調査

(5) 調査問題

- ・ 学習指導要領で育成を目指す、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題を出題
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善のメッセージを発信

(6) 今年度の調査の特徴

- ・ CBT調査の導入(中学校理科)
- ・ 生徒質問でのランダム方式の試行
- ・ 多様な生徒の状況把握
- ・ 結果公表の内容、スケジュールの改善

2 学力調査の結果概要

(1) 小学校6年 平均正答数・平均正答率

小学校では、国語、算数ともに、全国の平均正答数とほぼ同等であり、理科は全国の平均正答数を上回る結果となった。

	令和7年度		【参考】令和6年度 ※理科は令和4年度	
	鹿児島県	全 国	鹿児島県	全 国
国語	9.3 / 14 問 (67%)	9.4 / 14 問 (66.8%)	9.6 / 14 問 (69%)	9.5 / 14 問 (67.7%)
算数	9.2 / 16 問 (57%)	9.3 / 16 問 (58.0%)	10.0 / 16 問 (62%)	10.1 / 16 問 (63.4%)
理科	10.2 / 17 問 (60%)	9.7 / 17 問 (57.1%)	11.4 / 17 問 (67%)	10.8 / 17 問 (63.3%)

※ 県平均正答率は、小数第一位を四捨五入した値(整数値)である。

※ 全国平均正答率は、小数第二位を四捨五入した値である。

(2) 中学校3年 平均正答数・平均正答率・IRTスコア

中学校では、国語は全国の平均正答数とほぼ同等であるが、数学は全国平均正答数を、理科は全国のIRTスコアを下回る結果となった。

	令和7年度		【参考】令和6年度 ※理科は令和4年度	
	鹿児島県	全 国	鹿児島県	全 国
国語	7.5 / 14 問 (53%)	7.6 / 14 問 (54.3%)	8.4 / 15 問 (56%)	8.7 / 15 問 (58.1%)
数学	6.7 / 15 問 (45%)	7.2 / 15 問 (48.3%)	8.0 / 16 問 (50%)	8.4 / 16 問 (52.5%)
理科	493 (IRTスコア)	503 (IRTスコア)	10.2 / 21 問 (49%)	10.4 / 21 問 (49.3%)

※ 県平均正答率は、小数第一位を四捨五入した値(整数値)である。

※ 全国平均正答率は、小数第二位を四捨五入した値である。

(3) 無解答率

無解答率については、すべての教科で全国平均を下回っており、児童生徒が調査に粘り強く取り組んだことがうかがえる。

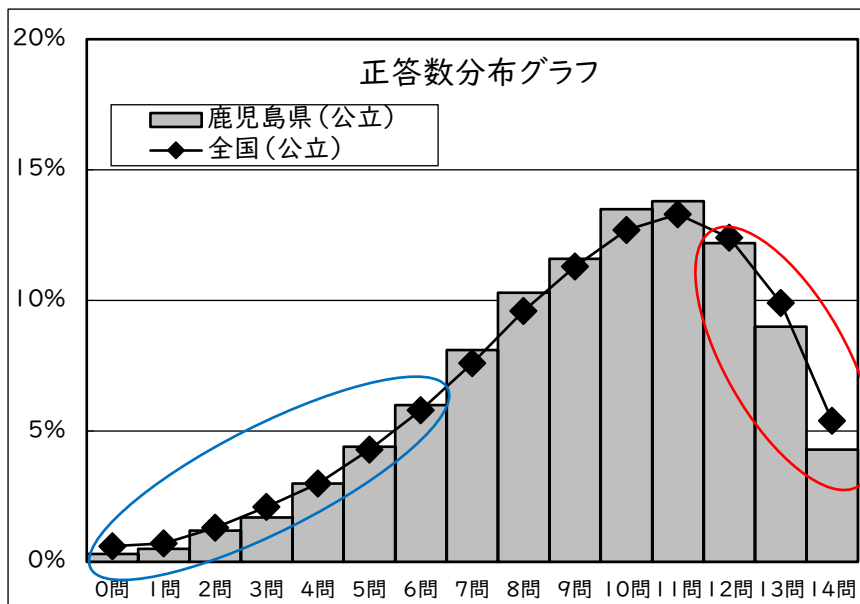
〈令和7年度〉

	小学校6年		中学校3年	
	鹿児島県	全 国	鹿児島県	全 国
国語	2.2%	3.3%	6.2%	6.7%
算数・数学	2.7%	3.6%	10.3%	10.6%
理科	1.4%	2.8%	1.6%	1.8%

※ 中学校理科は公開問題における無解答率

3 教科別、観点別及び領域別の結果概要

(1) 小学校国語



	鹿児島県	全国
中央値	10.0	10.0
最頻値	11.0	11.0
標準偏差	2.9	3.0

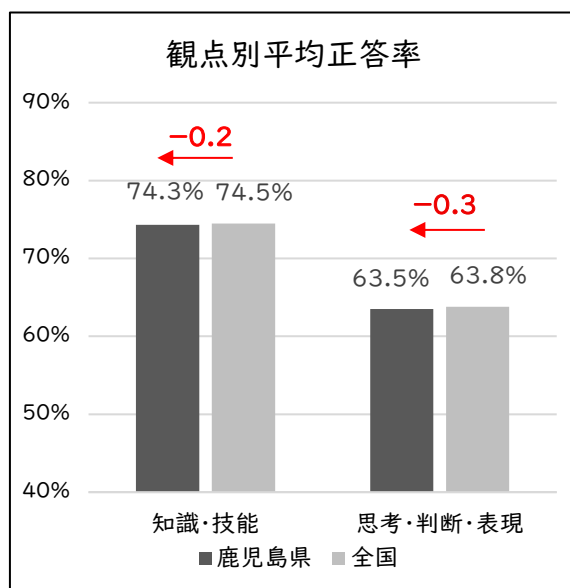
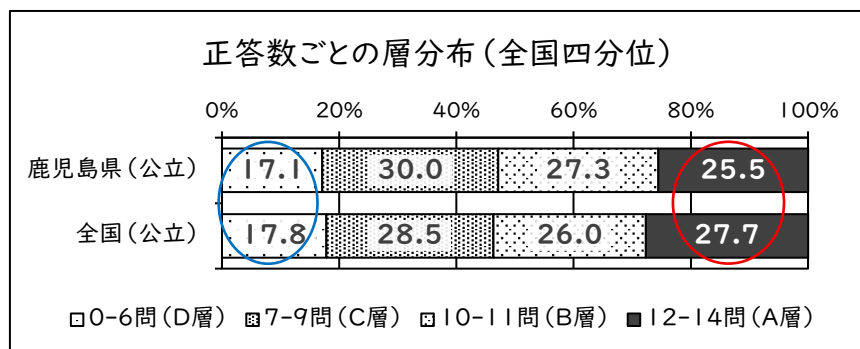
全国の四分位を基にした正答数ごとの層分布では、A層(上位層)の割合が全国より低い。

[本県25.5% 全国27.7%
(全国との差-2.2ポイント)]

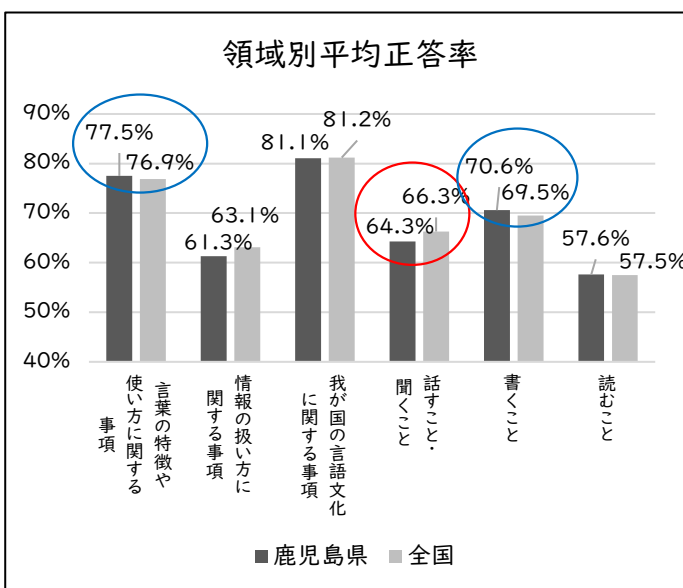
正答数分布グラフから、A層の中でも特に、正答数の多い層が少ないことが分かる。

一方、D層(下位層)の割合は、全国より低い。

[本県17.1% 全国17.8%
(全国との差-0.7ポイント)]



「知識・技能」は全国の平均正答率との差が-0.2ポイント、「思考・判断・表現」は、全国の平均正答率との差が-0.3ポイントであり、どちらの観点も全国とほぼ同等である。



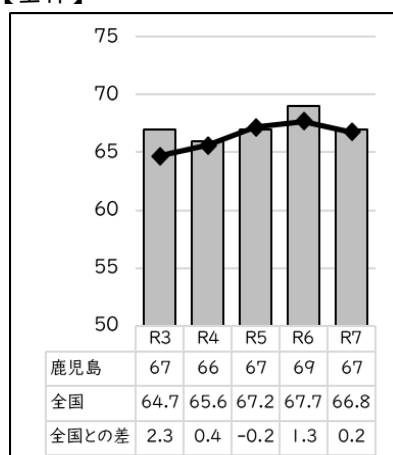
全国の平均正答率との差は、「言葉の特徴や使用に関する事項」の領域で+0.6ポイント、「書くこと」の領域で+1.1ポイントであり、6領域のうち2領域が、全国の平均正答率を上回っている。

一方で、「話すこと・聞くこと」の領域については、全国の平均正答率の差が-2.0ポイントであり、課題が見られる。

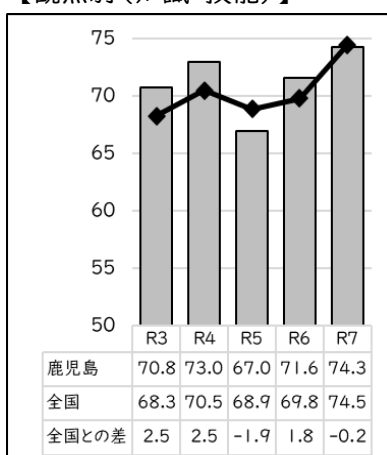
過去5年間の平均正答率の推移

■ 鹿児島県（公立） ◆ 全国（公立）

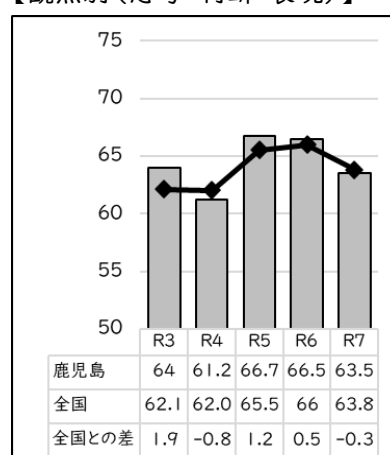
【全体】



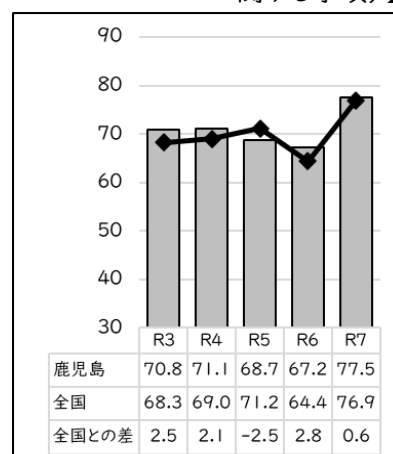
【観点別（知識・技能）】



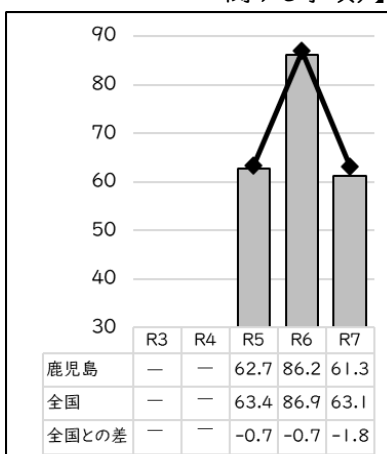
【観点別（思考・判断・表現）】



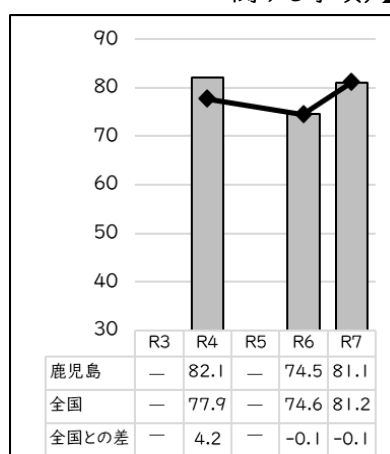
【領域別（言葉の特徴や使い方に
関する事項）】



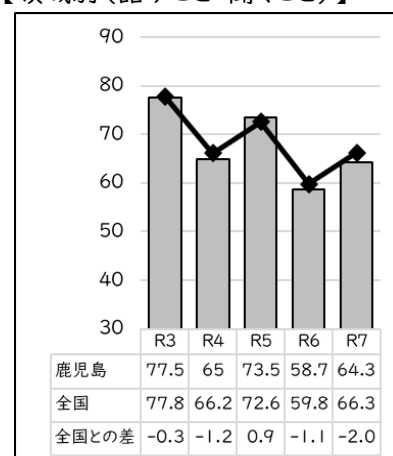
【領域別（情報の扱い方に
関する事項）】



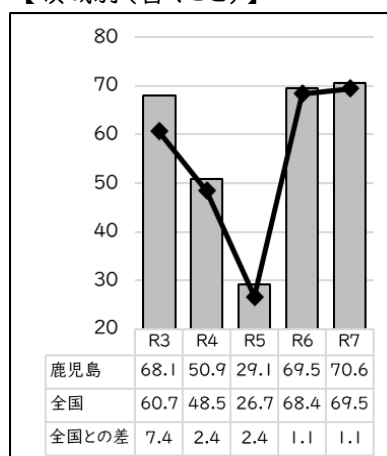
【領域別（我が国の言語文化に
関する事項）】



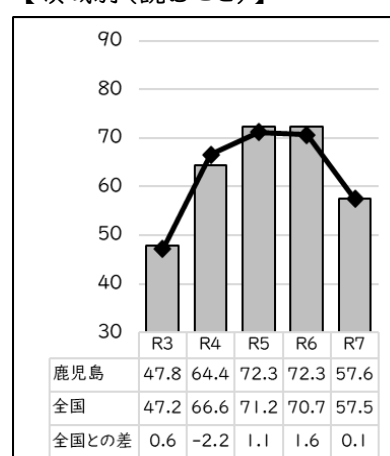
【領域別（話すこと・聞くこと）】



【領域別（書くこと）】



【領域別（読むこと）】



- 過去5年間の平均正答率の推移を見ると、全国とほぼ同等かそれを上回って推移している。
- 観点別では、「知識・技能」は全国を上回るかほぼ同等であり、「知識・技能」の定着が図られている。一方で、「思考・判断・表現」は令和5年度以降、全国と同水準を推移している。
- 領域別では、「言葉の特徴や使い方に
関する事項」「書くこと」の領域では、全国を上回る結果で推移している。一方で、「情報の扱い方に
関する事項」、「話すこと・聞くこと」の領域については、全国とほぼ同等か下回る結果で推移しており、課題が見られる。

正答数ごとの層分布の推移

※ 全国の児童全員の正答分布の状況から高い順に概ね 25%ずつになるように区切って、A, B, C, D の 4 つの層に分けて分析しました。ただし、正答数が同じ場合は、上位の区分に含んでいます。

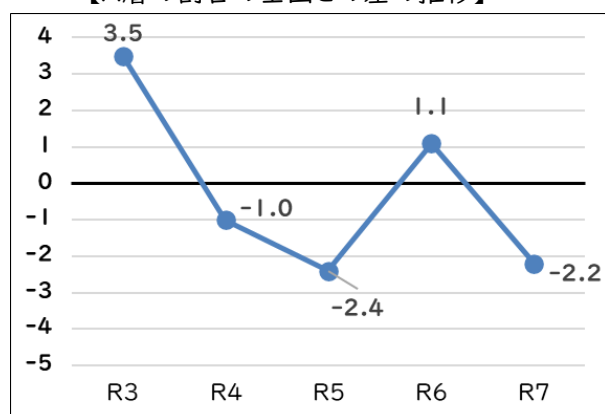
A (正答率の高い層) → B → C → D (正答率の低い層) とします。

	R3			R4			R5			R6			R7		
	平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率		
	67 (64.7)			66 (65.6)			67 (67.2)			69 (67.7)			67 (66.8)		
	各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合		
	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差
A層	40.6	37.1	3.5	27.4	28.4	-1.0	24.7	27.1	-2.4	31.1	30.0	1.1	25.5	27.7	-2.2
B層	24.4	24.1	0.3	25.5	24.4	1.1	28.6	28.1	0.5	25.2	25.8	-0.6	27.3	26.0	1.3
C層	17.4	17.9	-0.5	28.0	26.2	1.8	22.7	20.8	1.9	20.6	19.6	1.0	30.0	28.5	1.5
D層	17.5	20.9	-3.4	19.1	21.0	-1.9	23.9	23.9	0.0	23.0	24.6	-1.6	17.1	17.8	-0.7

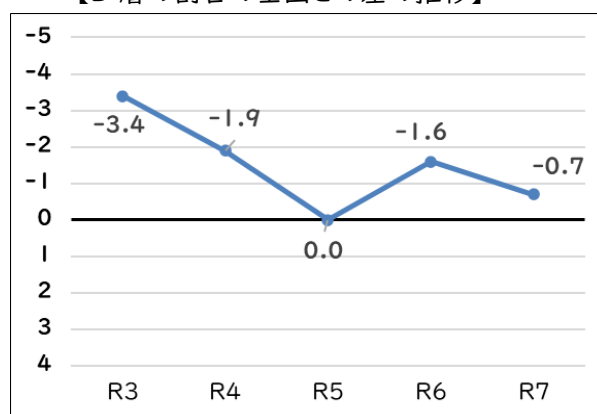
※ 平均正答率の () 内の値は全国の平均正答率

※ 鹿児島県と全国の差の値は、A, B層については差がプラス方向に大きいほど、C, D については差がマイナス方向に大きいほど、よい結果であることを表しています。

【A層の割合の全国との差の推移】



【D層の割合の全国との差の推移】



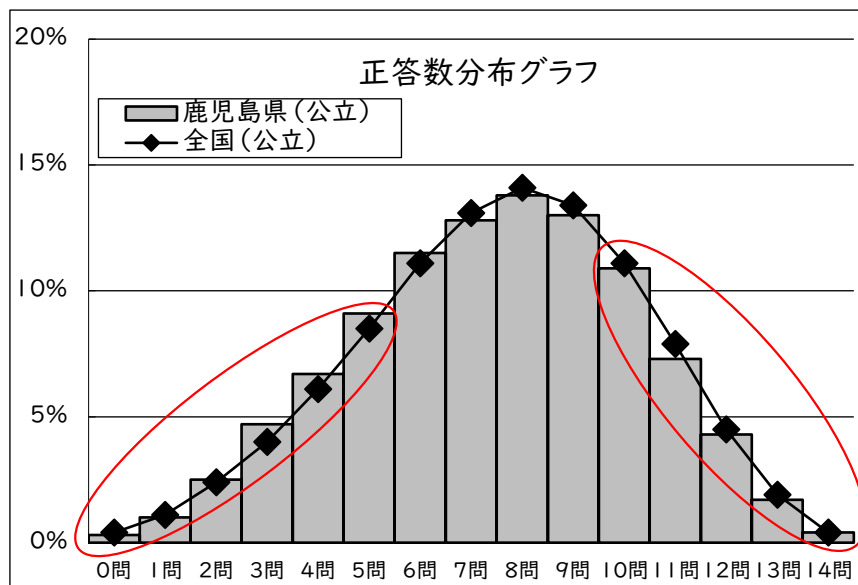
- A層(上位層)の割合は全国より低くなる傾向にあり、全国との差が令和3年度の+3.5ポイントから-2.2ポイントまで減少しており、上位層の伸びが課題である。
- D層(下位層)の割合は、全国よりとほぼ同等か低い状況が続いており、基礎的な学力の底上げが一定程度図られていると考えられる。
- 全体として、極端な二極化は見られず、学力の分布は安定している。

小学校国語に関する考察

本県の小学校国語では、平均正答率は全国とほぼ同等かそれを上回る水準で推移しています。また、上位層がやや少ないものの下位層の割合は全国より低く、極端な二極化は見られません。観点別に見ると、「思考・判断・表現」では全国と同水準で推移している状況にあり、文章の構造や意図を踏まえて自分の考えを的確にまとめる力の伸びに課題が見られます。領域別では、「情報の扱い方に関する事項」「話すこと・聞くこと」の領域で、全国と同等か下回る傾向にあり、目的や意図に応じて情報を整理・発信する力の育成に課題が見られます。

全体として、基礎的な学力の底上げは図られているため、より高次の思考や表現を深める学習の充実により、更なる学力の伸びを図ることが求められます。

(2) 中学校国語



	鹿児島県	全国
中央値	8.0	8.0
最頻値	8.0	8.0
標準偏差	2.7	2.7

全国の四分位を基にした正答数ごとの層分布では、上位層の割合が全国より低い。

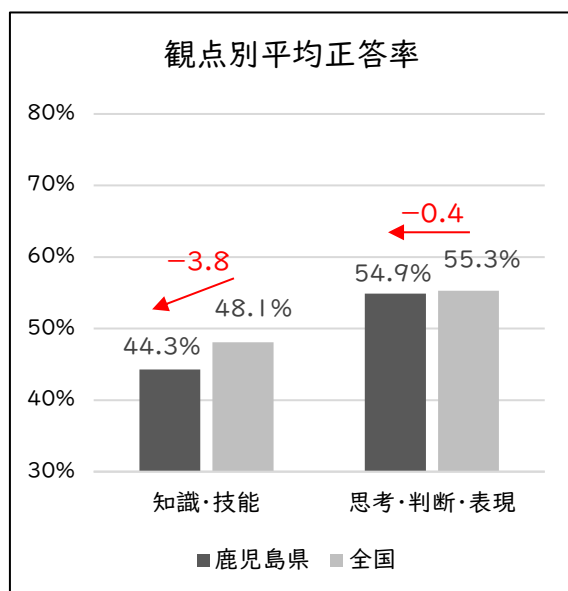
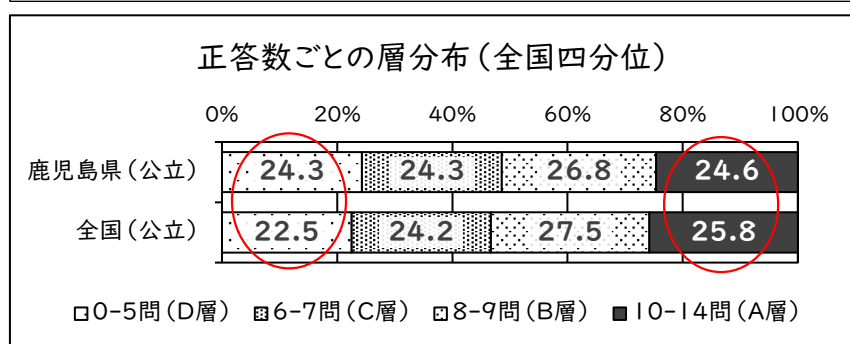
[本県24.6% 全国25.8%

(全国との差-1.2ポイント)]

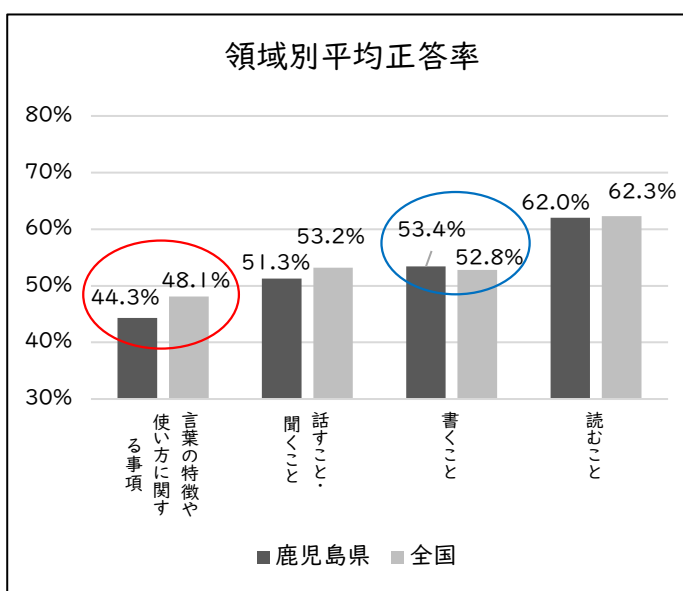
また、下位層の割合も全国より高い。

[本県24.3% 全国22.5%

(全国との差+1.8ポイント)]



「知識・技能」は、全国の平均正答率との差が-3.8ポイントで、全国を下回っている。また、「思考・判断・表現」は、全国の平均正答率との差が-0.4ポイントで全国とほぼ同等である。



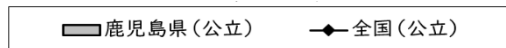
「書くこと」の領域は、全国平均正答率との差が+0.6ポイントであり、全国を上回っている。

「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域は、全国平均正答率との差が-3.8ポイントとなっており、課題が見られる。

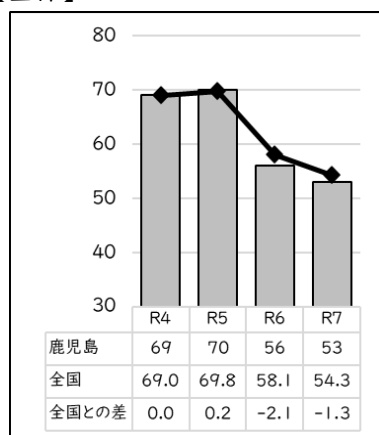
なお、6領域のうち、「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」については、出題がなかった。

過去4年間の平均正答率の推移

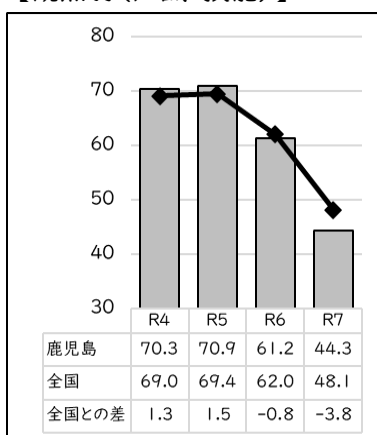
※ 現行指導要領から評価の観点、領域が変更となったため、ここでは、現行指導要領の全面実施となった令和4年度からの推移を分析します。



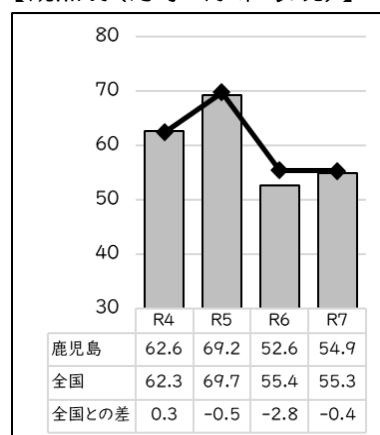
【全体】



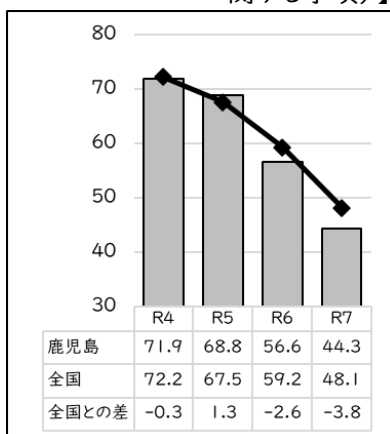
【観点別(知識・技能)】



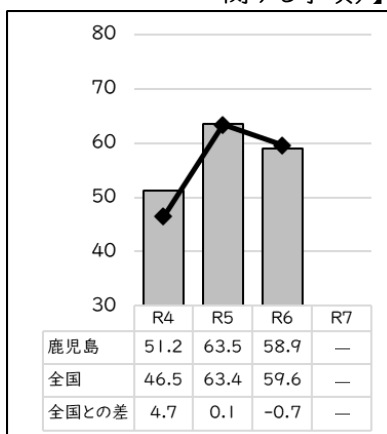
【観点別(思考・判断・表現)】



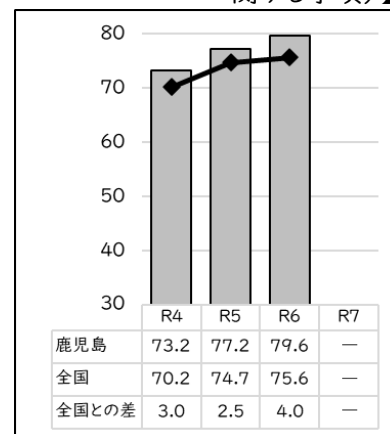
【領域別(言葉の特徴や使い方に
関する事項)】



【領域別(情報の扱い方に
関する事項)】

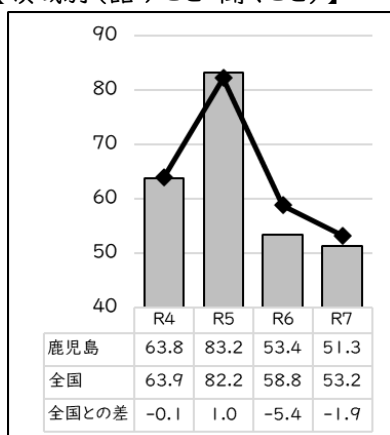


【領域別(我が国の言語文化に
関する事項)】

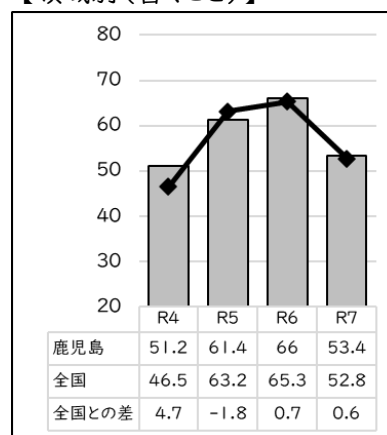


※ 「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」については、令和7年度に出題はありませんでした。

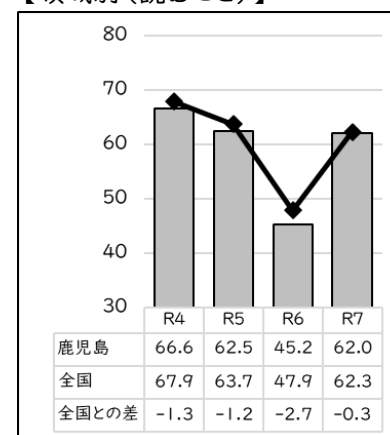
【領域別(話すこと・聞くこと)】



【領域別(書くこと)】



【領域別(読むこと)】



- 平均正答率については、全国と同様に低下傾向にある。全国の平均正答率との差については、令和5年度までは全国と同等であったが、令和6年度、令和7年度は全国を下回っている。
- 「知識・技能」については、令和5年度まで全国の平均正答率を上回っていたが、令和6年度、令和7年度は下回っている。「思考・判断・表現」については、令和6年度に全国を下回ったものの、令和7年度は、全国とほぼ同等まで改善している。
- 「言葉の特徴や使い方にに関する事項」の領域については、平均正答率が全国と同様に低下傾向にあり、全国の平均正答率との差も拡大している。
- 「書くこと」の領域については、令和5年度を除き、全国の平均正答率を上回っている。また、「読むこと」の領域については、全国の平均正答率を下回っているものの、その差は縮小しており、改善傾向が見られる。

正答数ごとの層分布の推移

※ 全国の生徒全員の正答分布の状況から高い順に概ね 25%ずつになるように区切って、A, B, C, D の 4 つの層に分けて分析しました。ただし、正答数が同じ場合は、上位の区分に含んでいます。

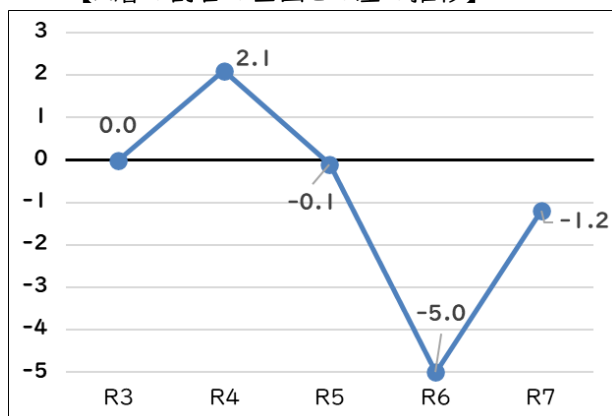
A (正答率の高い層) → B → C → D (正答率の低い層) とします。

	R3			R4			R5			R6			R7		
	平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率		
	64 (64.6)			69 (69.0)			70 (69.8)			56 (58.1)			53 (54.3)		
	各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合		
	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差
A層	34.5	34.5	0.0	33.2	31.1	2.1	33.3	33.4	-0.1	28.5	33.5	-5.0	24.6	25.8	-1.2
B層	25.6	26.8	-1.2	27.3	28.5	-1.2	24.2	24.2	0.0	22.3	21.2	1.1	26.8	27.5	-0.7
C層	20.2	20	0.2	17.9	19.0	-1.1	23.6	22.9	0.7	28.9	26.4	2.5	24.3	24.2	0.1
D層	19.8	18.6	1.2	21.6	21.3	0.3	18.9	19.5	-0.6	20.3	18.9	1.4	24.3	22.5	1.8

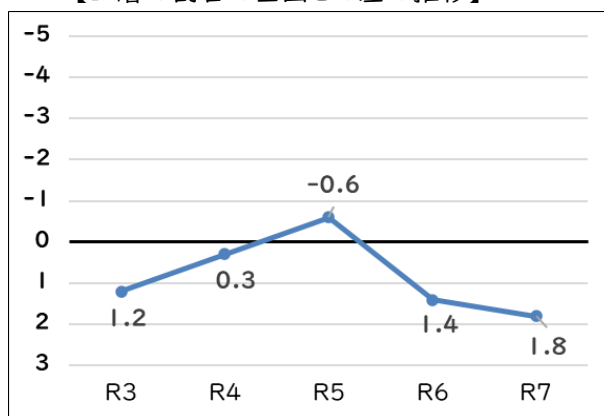
※ 平均正答率の () 内の値は全国平均正答率

※ 鹿児島県と全国の差の値は、A, B層については差がプラス方向に大きいほど、C, Dについては差がマイナス方向に大きいほど、よい結果であることを表しています。

【A層の割合の全国との差の推移】



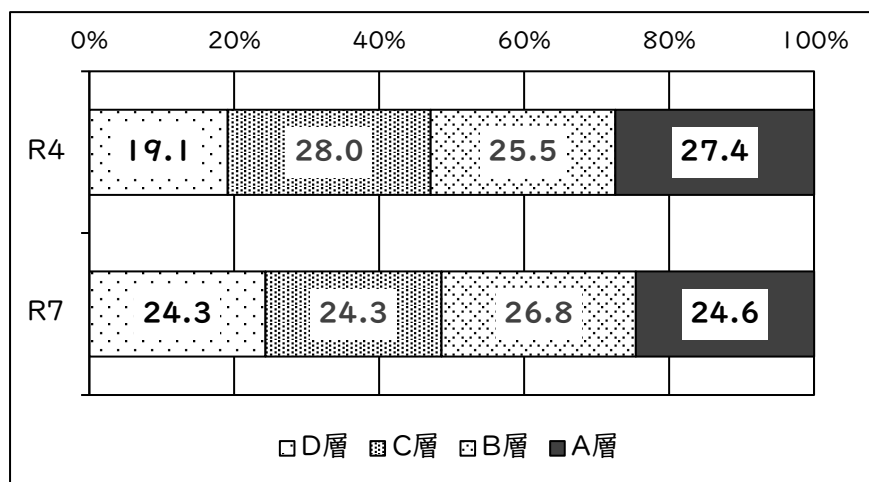
【D層の割合の全国との差の推移】



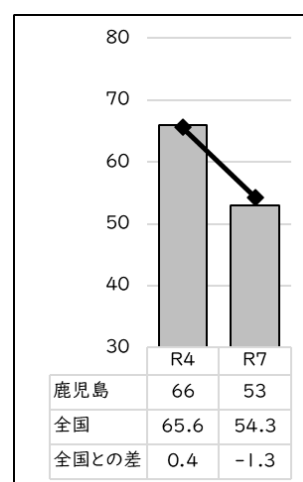
- A層(上位層)の割合の全国との差は、令和4年度に最大(+2.1ポイント)となった後、令和6年度に最小(-5.0ポイント)を示したが、令和7年度には、-1.2ポイントまで改善した。このことは、上位層の割合が全国より少ない状況にあるものの、令和6年度を底として回復傾向にあることを示している。
- D層(下位層)の割合の全国との差は、令和5年度に最小(-0.6ポイント)であったが、その後年々増加し、令和7年度には最大(+1.8ポイント)になった。これは、下位層の割合が全国より多い状態が続き、学力の下方拡大が進行していることを示している。

現中学校3年生の小学校6年時（令和4年度）との比較

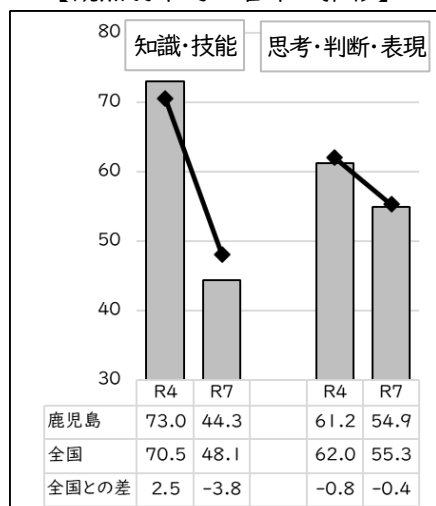
【正答数ごとの層分布の推移（全国四分位）】



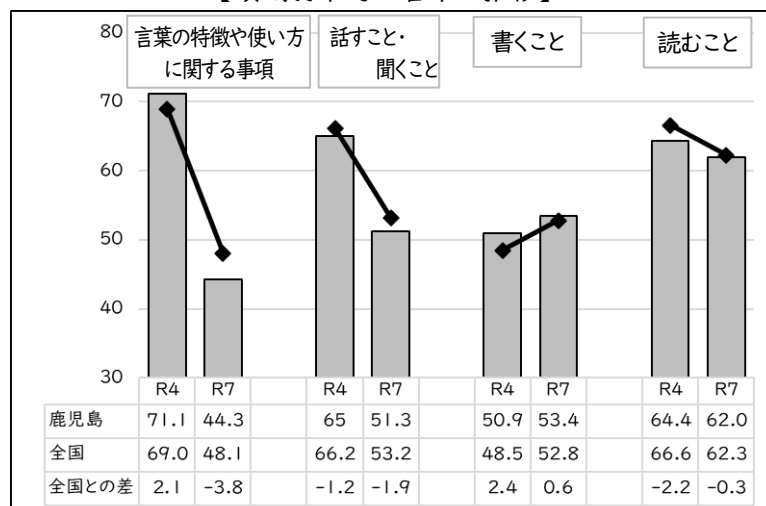
【平均正答率の推移】



【観点別平均正答率の推移】



【領域別平均正答率の推移】



※ 「情報の扱い方に関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」については、令和7年度に出題がなかったため掲載していません。

- 層分布の推移を見ると、小学校6年時と比べA層（上位層）が2.8ポイント減少し、B層が1.3ポイント増加している。一方でD層（下位層）が5.2ポイント増加し、C層が3.7ポイント減少している。このことから、全体として中下位層の割合が増加し、学力分布の下方への広がりが見られる。
- 平均正答率は全国と同様に低下傾向にある。全国との差は、小学校6年時は+0.4ポイントから中学校3年時には-1.3ポイントへと転じ、全国平均を下回る結果となった。
- 観点別に見ると、「知識・技能」は大きく低下しており、全国との差も、小学校6年時の+2.5ポイントから中学校3年時には-3.8ポイントになっている。ただし、出題数が小学校時の6問から中学校時は2問に減少しており、単純に比較することは難しい。一方で、「思考・判断・表現」は、全国平均正答率との差が-0.8%から-0.4%へと縮小しており、改善の傾向が見られる。
- 領域別では、「書くこと」の領域は、平均正答率が小学校6年時より上昇している。また、「読むこと」の領域は、平均正答率が低下しているものの、全国との差は小学校6年時の-2.2ポイントから中学校3年時には-0.3ポイントと縮小しており、改善が見られる。一方で、「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域では、平均正答率の全国との差が小学校6年時の+2.1ポイントから、中学校3年時は-3.8ポイントとなり、課題が見られる。

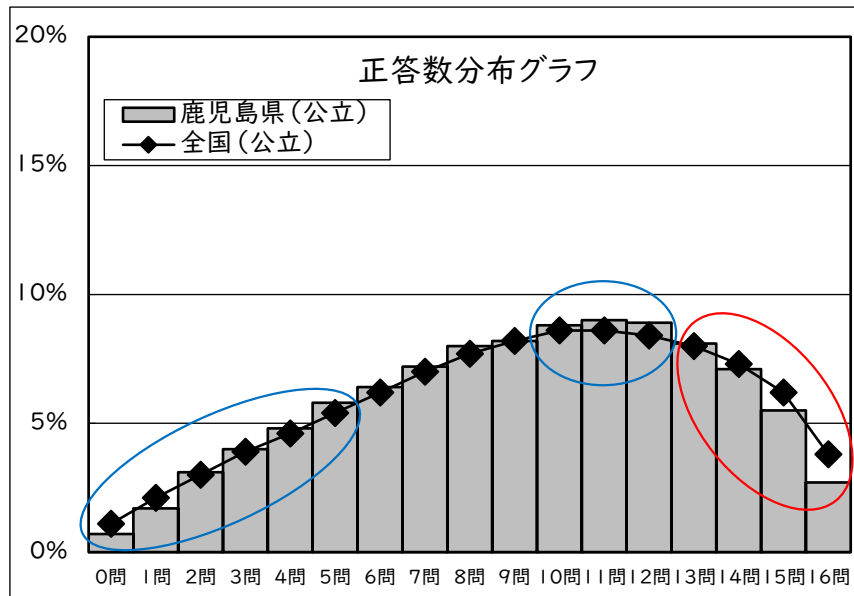
中学校国語に関する考察

本県の中学校国語では、各年度の平均正答率が全国と同様に低下する中で、上位層の割合がやや回復傾向を示す一方、下位層の割合が増加し、学力の二極化が進行していることがうかがえます。観点別に見ると、「思考・判断・表現」は全国とほぼ同水準を維持しているものの、「知識・技能」は大きく低下しており、言葉の知識を活用して思考や表現に生かす力の育成が課題と考えられます。領域別では、「書くこと」の平均正答率が上昇しており、言語活動を通して自分の考えを構成し表現する学習の成果が表われています。一方で、「言葉の特徴や使い方に関する事項」では全国との差が依然として見られ、語彙や文法など基礎的な知識の活用が十分でないことがうかがえます。

今後は、読む活動の中で、言葉の働きや表現の意図を考察させる学習の充実を図り、知識及び技能の定着の場と思考力、判断力、表現力等の育成を目指した活用の場を往還させる授業改善を進めることが求められます。

メモ

(3) 小学校算数



	鹿児島県	全国
中央値	10.0	10.0
最頻値	11.0	11.0
標準偏差	3.9	4.0

A 層(上位層)の割合が全国と比べて低い。

[本県23.4% 全国25.3%
(全国との差-1.9ポイント)]

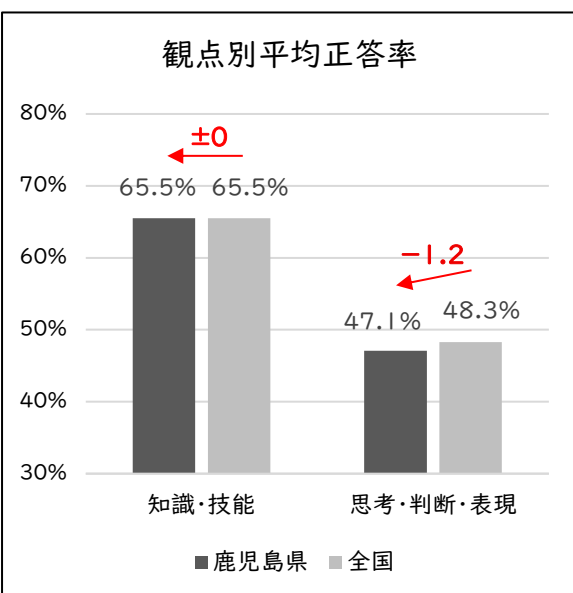
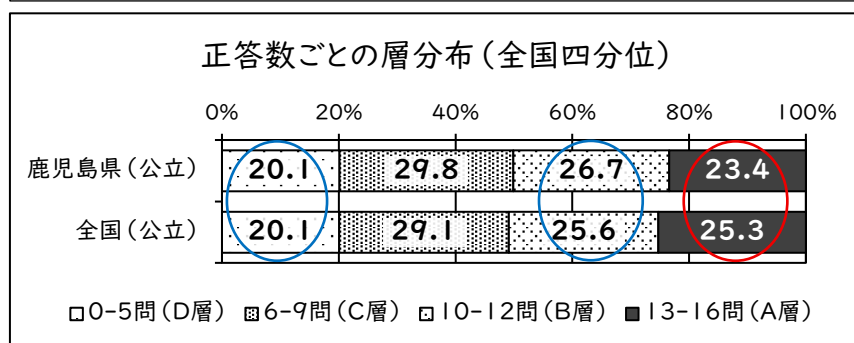
正答数分布グラフから、A 層の中でも特に、正答数の多い層が全国より少ない。

B 層(中位層)の割合は全国と比べて高い。

[本県26.7% 全国25.6%
(全国との差+1.1ポイント)]

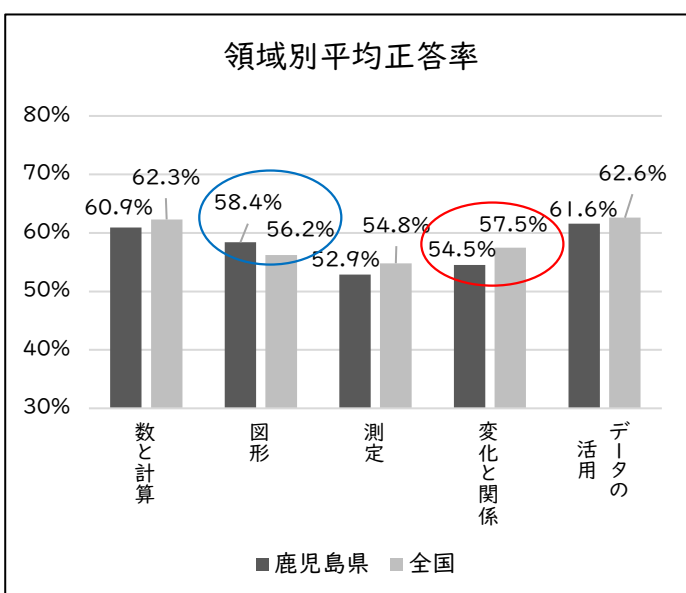
D 層(下位層)の割合は全国と同等である。

[本県20.1% 全国20.1%]



「知識・技能」は、全国の平均正答率との差はなく、同等である。

「思考・判断・表現」は、全国の平均正答率との差が-1.2ポイントであり、全国を下回っており、「思考・判断・表現」に課題が見られる。



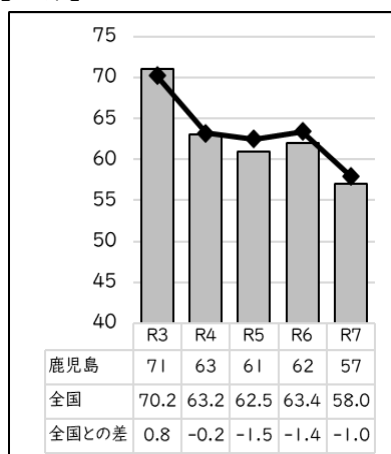
5領域のうち、1領域で全国の平均正答率を上回っている。

「図形」の領域では、全国の平均正答率との差が+2.2ポイント、であるが、「変化と関係」の領域は全国の平均正答率との差が-3.0ポイントであり、全国を下回っている。

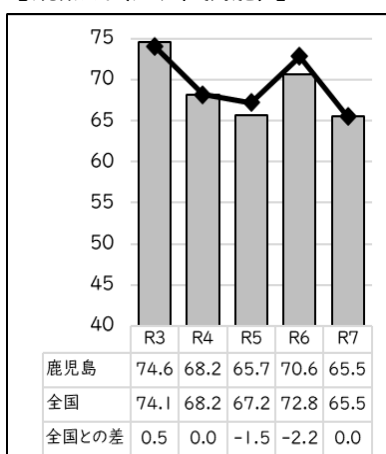
過去5年間の平均正答率の推移

■ 鹿児島県（公立） ◆ 全国（公立）

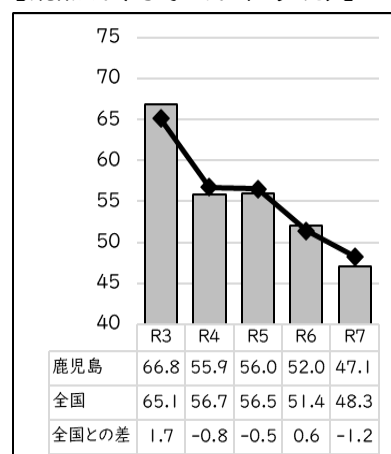
【全体】



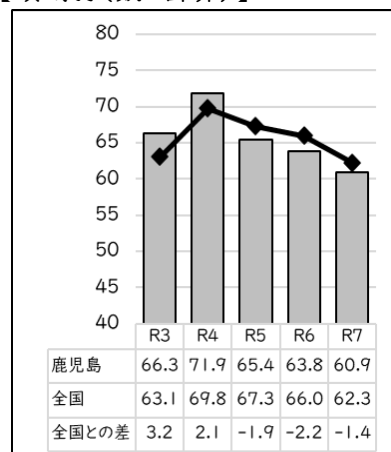
【観点別（知識・技能）】



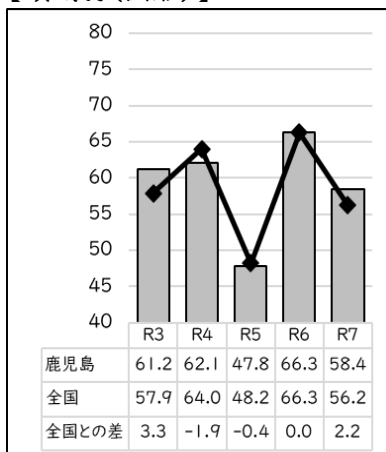
【観点別（思考・判断・表現）】



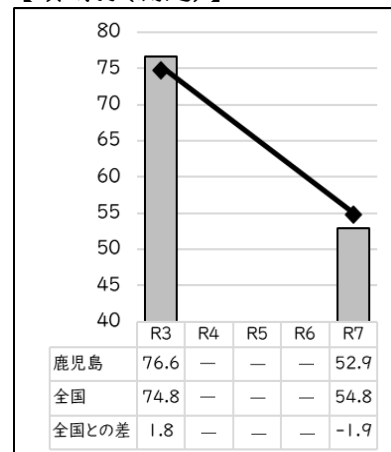
【領域別（数と計算）】



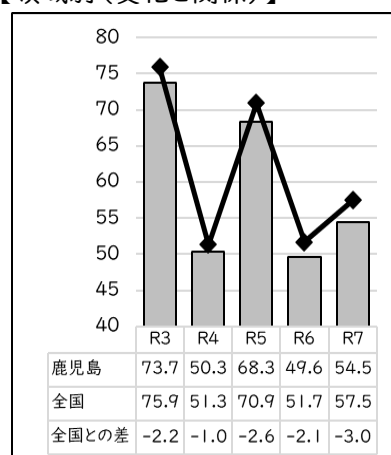
【領域別（図形）】



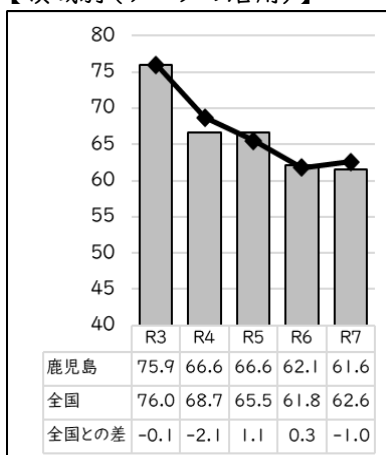
【領域別（測定）】



【領域別（変化と関係）】



【領域別（データの活用）】



- 過去5年間の平均正答率の推移を見ると、令和3年度は全国の平均正答率を上回ったものの、それ以降は全国と同等か下回る結果で推移している。
- 観点別では、「知識・技能」は概ね全国と同水準を推移しており、「知識・技能」の定着は一定程度図られている。「思考・判断・表現」は、全国との差が令和3年度の+1.7ポイントから-1.2ポイントとなり、全国と同等から下回る結果へと推移している。このことは課題場면을数学的に捉えて思考し、表現することに課題が見られることを示唆している。
- 領域別に見ると、「図形」の領域では、全国との差が令和4年度の-1.9ポイントから+2.2ポイントまで伸びてきている。一方で、「変化と関係」は、全国を下回る結果で推移しており、関数的な見方を働かせて数量の変化を捉える力の育成が課題である。

正答数ごとの層分布の推移

※ 全国の児童全員の正答分布の状況から高い順に概ね 25%ずつになるように区切って、A, B, C, D の 4 つの層に分けて分析しました。ただし、正答数が同じ場合は、上位の区分に含んでいます。

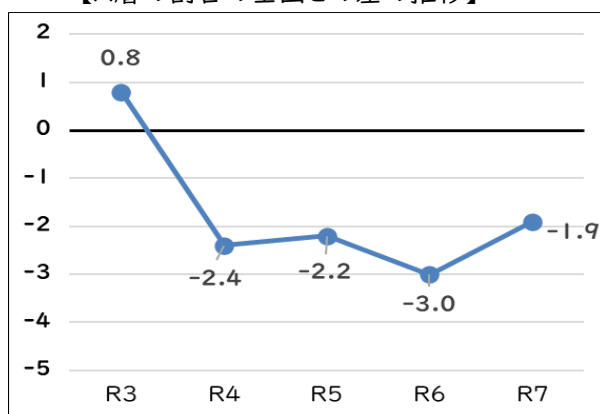
A (正答率の高い層) → B → C → D (正答率の低い層) とします。

	R3			R4			R5			R6			R7		
	平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率		
	71 (70.2)			63 (63.2)			61 (62.5)			62 (63.4)			57 (58.0)		
	各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合		
	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差
A層	32.1	31.3	0.8	27.8	30.2	-2.4	27.8	30	-2.2	30.7	33.7	-3.0	23.4	25.3	-1.9
B層	23.6	22.1	1.5	22.9	21.7	1.2	19.7	20.1	-0.4	19.1	18.4	0.7	26.7	25.6	1.1
C層	24.6	25.1	-0.5	25.8	24.4	1.4	32.2	30.6	1.6	30.1	27.7	2.4	29.8	29.1	0.7
D層	19.6	21.6	-2.0	23.7	23.7	0.0	20.5	19.5	1.0	20.1	20.1	0.0	20.1	20.1	0.0

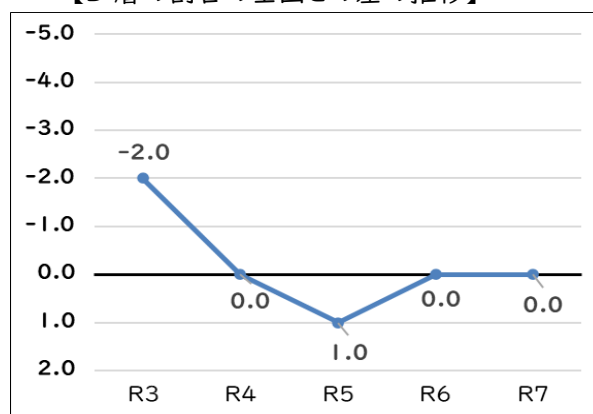
※ 平均正答率の()内の値は全国平均正答率

※ 鹿児島県と全国の差の値は、A, B層については差がプラス方向に大きいほど、C, D については差がマイナス方向に大きいほど、よい結果であることを表しています。

【A層の割合の全国との差の推移】



【D層の割合の全国との差の推移】



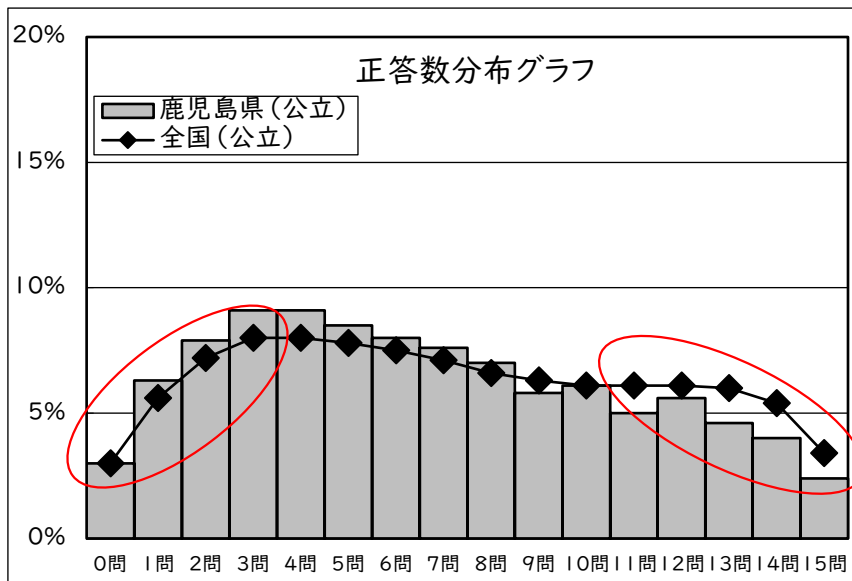
- A層(上位層)の割合は、令和3年度が最大で、それ以降は減少傾向が続く、全国を下回る状況にある。ただし、令和7年度は、前年度を上回り、改善の兆しが見られる。
- D層(下位層)の割合は全国とほぼ同水準で推移しており、学力の下方拡大は抑えられている。
- 全体としては上位層の伸び悩みが課題である。

小学校算数に関する考察

本県の小学校算数では、平均正答率は全国とほぼ同等か下回る結果で推移しています。下位層の割合は、全国と同等であり、学力の下方拡大は抑えられていますが、上位層の割合が減少傾向にあります。観点別では、「知識・技能」は全国とほぼ同等であり、「知識・技能」の定着は一定程度図られています。一方で、「思考・判断・表現」は全国との差が拡大する傾向にあり、事象を数学的な見方や考え方を働かせて、数学的に捉え、考察したり、説明したりする力の育成に課題が見られます。領域別では、「図形」で全国を上回るなど、改善の傾向が見られます。一方で、「変化と関係」の領域では、全国を下回る結果が続いており、数量の変化を関数的に捉えて考察する力の定着に課題が見られます。

今後は、単元全体でどの資質・能力を身に付けるのかを明確にするとともに、学びの過程でどのように数学的な見方・考え方を働かせるかを意識して単元をデザインすることが必要です。また、児童が問いをもち、問題解決の過程で自ら考えたり、他者と協働したりすることで、思考力、判断力、表現力等を高めることができるように授業改善に取り組むことが求められます。

(4) 中学校数学



	鹿児島県	全国
中央値	6.0	7.0
最頻値	4.0	4.0
標準偏差	4.1	4.2

A 層(上位層)の割合が全国と比べて低い。

[本県21.6%, 全国 27.0%

(全国との差 -5.4ポイント)]

正答数分布グラフから、A 層の中でも特に、正答数の多い層が全国より少ないことが分かる。

また、C 層(中位層)、D 層(下位層)の割合は、全国と比べて高い。

C 層

[本県25.6%, 全国 23.3%

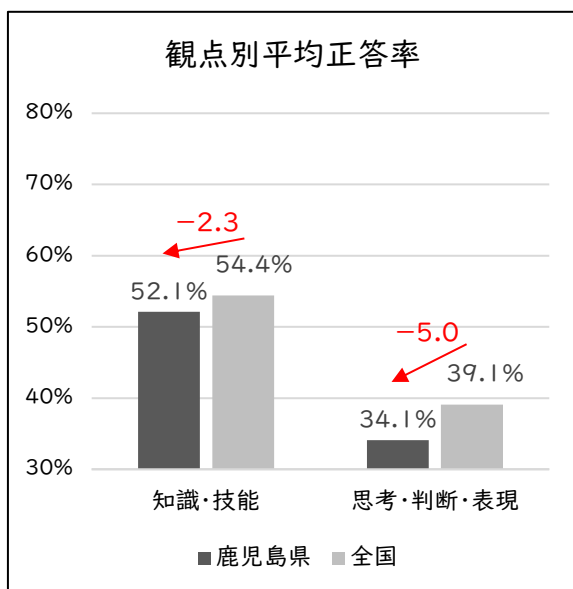
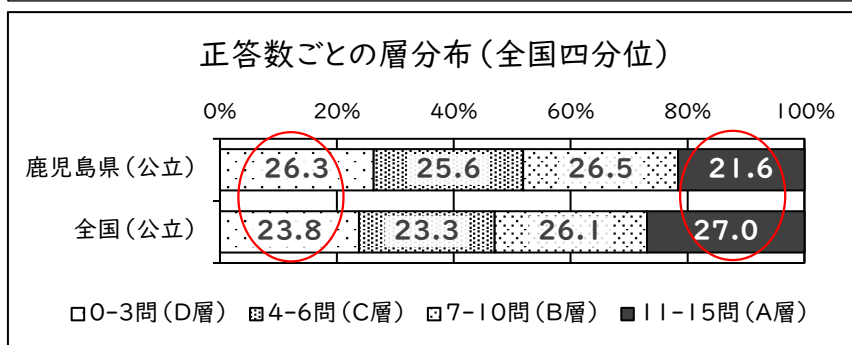
(全国との差 +2.3ポイント)]

D 層

[本県26.3%, 全国 23.8%

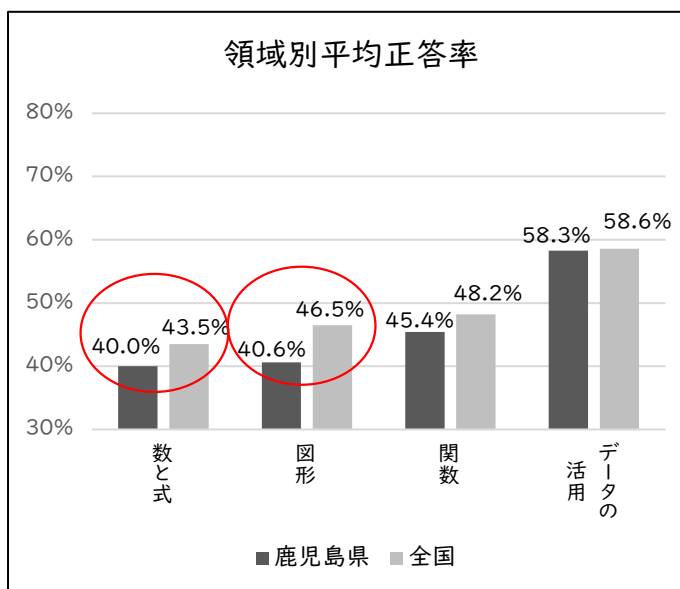
(全国との差 +2.5ポイント)]

全体として、正規分布の形になっておらず、中位層から下位層の割合が、上位層より多いことが分かる。



「知識・技能」、「思考・判断・表現」とともに、全国の平均正答率を下回っている。

特に、「思考・判断・表現」は、全国の平均正答率との差が-5.0ポイントであり、課題が見られる。

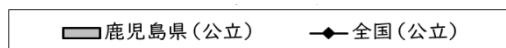


すべての領域において、全国の平均正答率を下回っている。

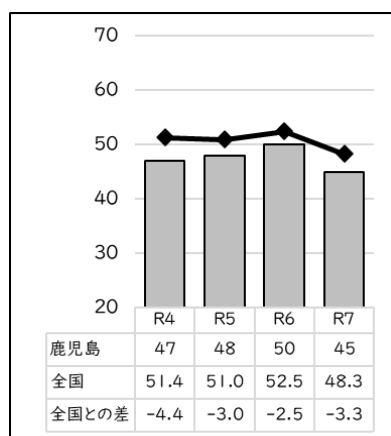
全国平均正答率との差を見ると、「数と式」が-3.5ポイント、「図形」の領域が-5.9ポイントと、特に差が大きく、課題が見られる。

過去4年間の平均正答率の推移

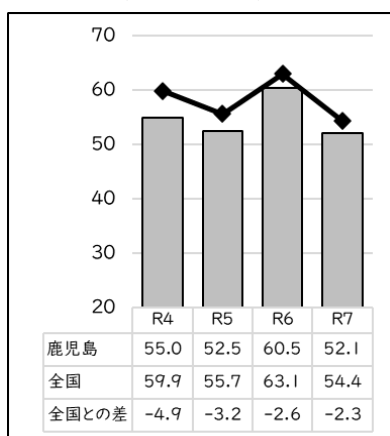
※ 現行指導要領から評価の観点、領域が変更となったため、ここでは、現行指導要領の全面実施となった令和4年度からの推移を分析します。



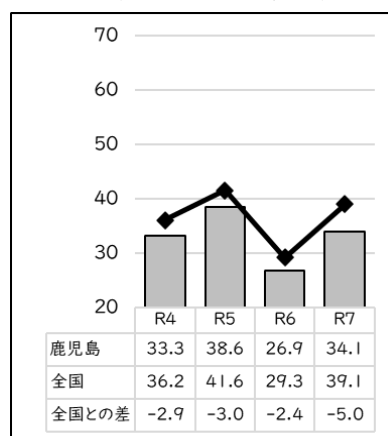
【全体】



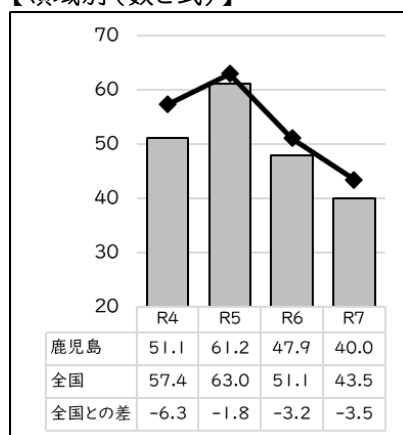
【観点別（知識・技能）】



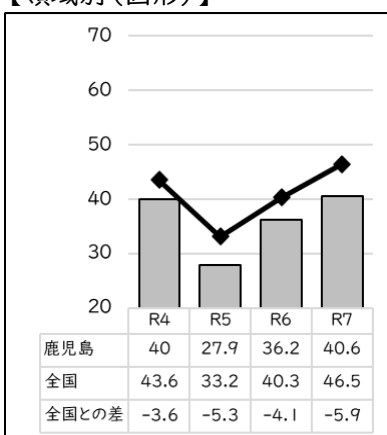
【観点別（思考・判断・表現）】



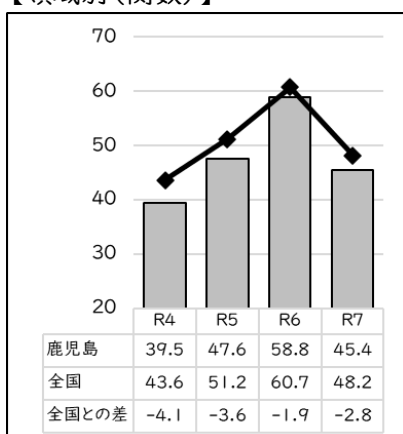
【領域別（数と式）】



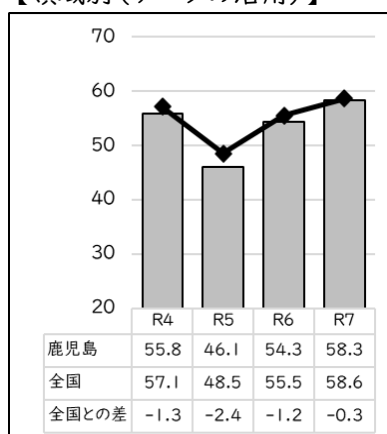
【領域別（図形）】



【領域別（関数）】



【領域別（データの活用）】



- 平均正答率については、全国と同様の推移を示すものの、常に全国を3ポイントほど下回っている。
- 観点別では、「知識・技能」、「思考・判断・表現」とともに、全国の平均正答率を下回っているが、「知識・技能」は令和4年度の-4.9ポイントから-2.3ポイントまで差が縮小し、基本的な知識・技能の定着が進みつつある。一方で、「思考・判断・表現」は、令和6年度までは-3ポイント前後で推移していたが、令和7年度は-5ポイントまで差が拡大しており、数学的に筋道立てて考察・説明する力の育成に課題がある。
- 領域別では、全ての領域で、常に全国の平均正答率を下回っている。「データの活用」領域では、全国との差が令和5年度の-2.4ポイントから-0.3ポイントまで縮小しており、改善が見られる。一方で、「数と式」領域では、令和5年度の-1.8ポイントから-3.5ポイントまで差が拡大しており、数や式についての概念的な理解や、数の性質を論理的に説明することに課題が見られる。また、「図形」領域では、令和4年度の-3.6ポイントから-5.9ポイントまで差が拡大しており、図形の性質についての基本的な知識・技能の定着や図形の性質を基に考察する力の育成が求められる。

正答数ごとの層分布の推移

※ 全国の生徒全員の正答分布の状況から高い順に概ね 25%ずつになるように区切って、A, B, C, D の 4 つの層に分けて分析しました。ただし、正答数が同じ場合は、上位の区分に含んでいます。

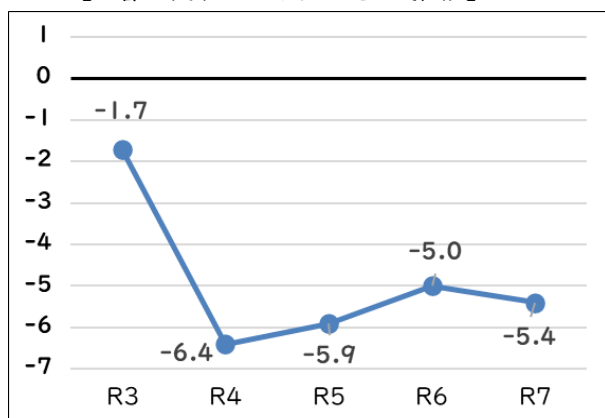
A (正答率の高い層) → B → C → D (正答率の低い層) とします。

	R3			R4			R5			R6			R7		
	平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率			平均正答率		
	56 (57.2)			47 (51.4)			48 (51.0)			50 (52.5)			45 (48.3)		
	各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合			各学力層の割合		
	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差	県	国	差
A層	28.8	30.5	-1.7	24.1	30.5	-6.4	21.5	27.4	-5.9	22.3	27.3	-5.0	21.6	27.0	-5.4
B層	19.9	20	-0.1	27.1	27.4	-0.3	24.8	24	0.8	30.2	29.3	0.9	26.5	26.1	0.4
C層	32.6	31.1	1.5	26.0	23.0	3.0	34.1	31.1	3.0	26.1	23.2	2.9	25.6	23.3	2.3
D層	18.8	18.6	0.2	22.8	19.0	3.8	19.4	17.5	1.9	21.3	20.3	1.0	26.3	23.8	2.5

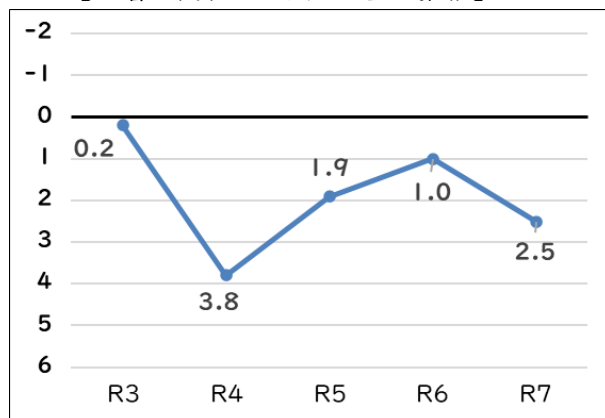
※ 平均正答率の()内の値は全国平均正答率

※ 鹿児島県と全国の差の値は、A, B層については差がプラス方向に大きいほど、C, Dについては差がマイナス方向に大きいほど、よい結果であることを表しています。

【A層の割合の全国との差の推移】



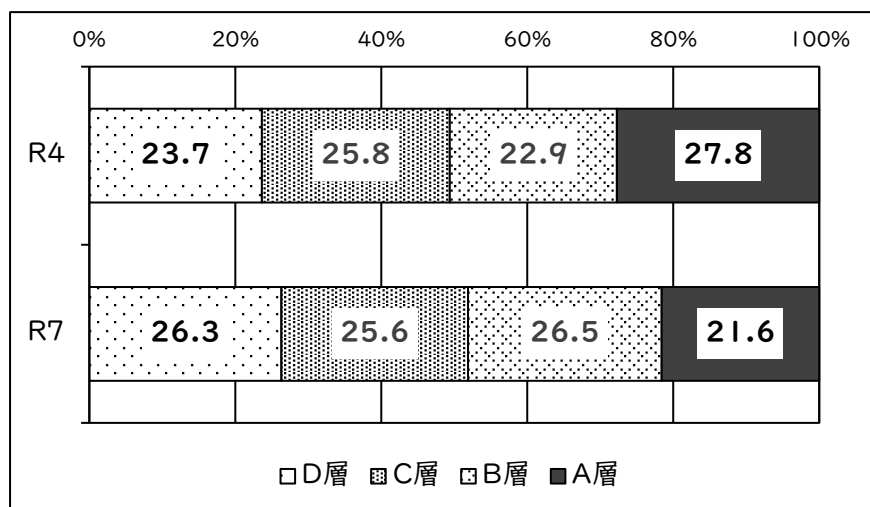
【D層の割合の全国との差の推移】



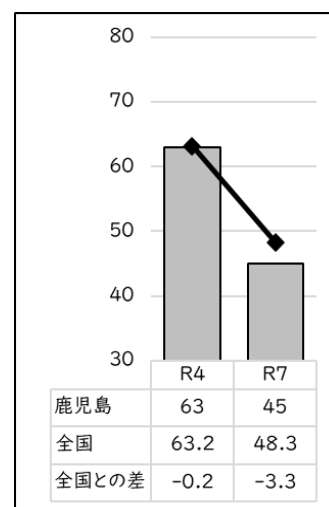
- A層(上位層)の割合は常に全国より少なく、その差は、令和3年度の-1.7ポイントから令和4年度の-6.4ポイントへと拡大し、その後も-5.5ポイント前後を推移している。このことは、全国と比べて上位層の割合が少ない状況が継続していることを示しており、中間層を上位層に引き上げるための取組が必要である。
- D層(下位層)の割合は常に全国より多い傾向にある。全国との差を見ると令和4年度に最大の+3.8ポイントまで増加したものの、令和5年度、令和6年度は減少し、改善傾向が見られていたが、令和7年度には再び増加に転じ、+2.5ポイントまで増加している。このことは、基礎的・基本的な内容の定着に課題を抱える生徒が一定数存在し、学力の下方拡大の傾向が見られることを示唆している。

現中学校3年生の小学校6年時（令和4年度）との比較

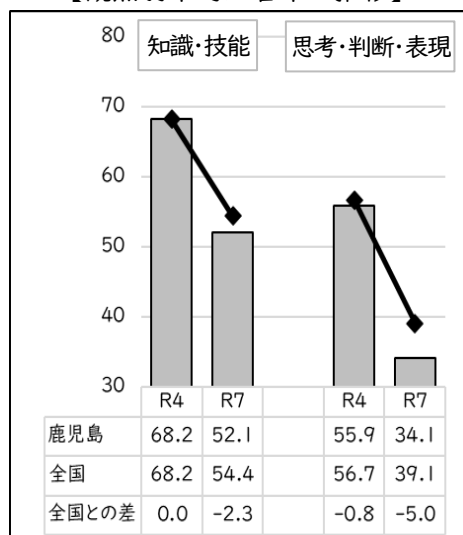
【正答数ごとの層分布の推移（全国四分位）】



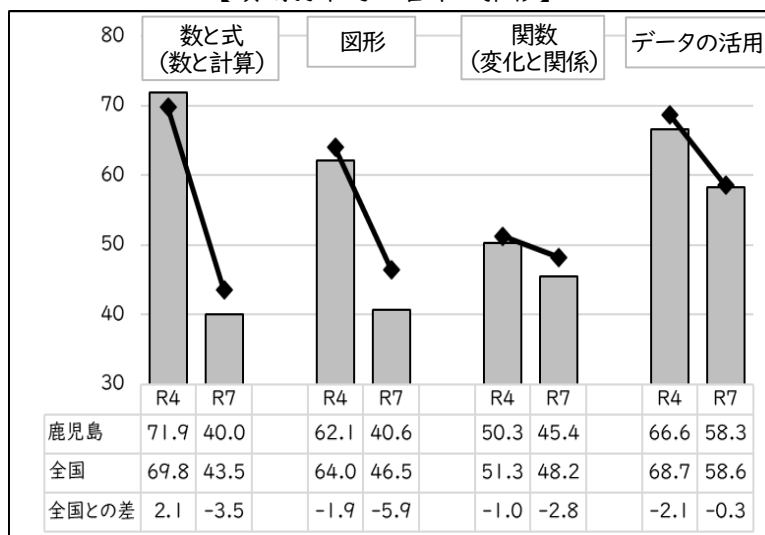
【平均正答率の推移】



【観点別平均正答率の推移】



【領域別平均正答率の推移】



- 層分布の推移を見ると、小学校6年時と比べA層（上位層）が6.2ポイント減少し、B層（中位層）が3.6ポイント、D層（下位層）が2.6ポイント増加している。このことから、全体として中下位層の割合が増加し、学力分布の下方への広がりが見られる。
- 平均正答率は全国と同様に低下傾向にあり、全国平均を下回る結果となっている。全国との差は、小学校6年時の-0.2ポイントから中学校3年時の-3.3ポイントへと差が拡大している。
- 観点別に見ると、「知識・技能」「思考・判断・表現」とともに全国と同様に低下傾向である。特に、「思考・判断・表現」は大きく低下しており、全国との差が、小学校6年時の-0.8ポイントから中学校3年時には-5.0ポイントまで拡大し、課題が見られる。
- 領域別では、全ての領域で低下傾向が見られるが、「データの活用」領域は、全国の平均正答率との差が小学校6年時の-2.1ポイントから中学校3年時は-0.3ポイントまで縮小しており、改善傾向が見られる。一方で「数と式」領域では、+2.1ポイントから-3.5ポイント、「図形」領域では、-1.9ポイントから-5.9ポイントまで全国との差が拡大しており、課題が見られる。

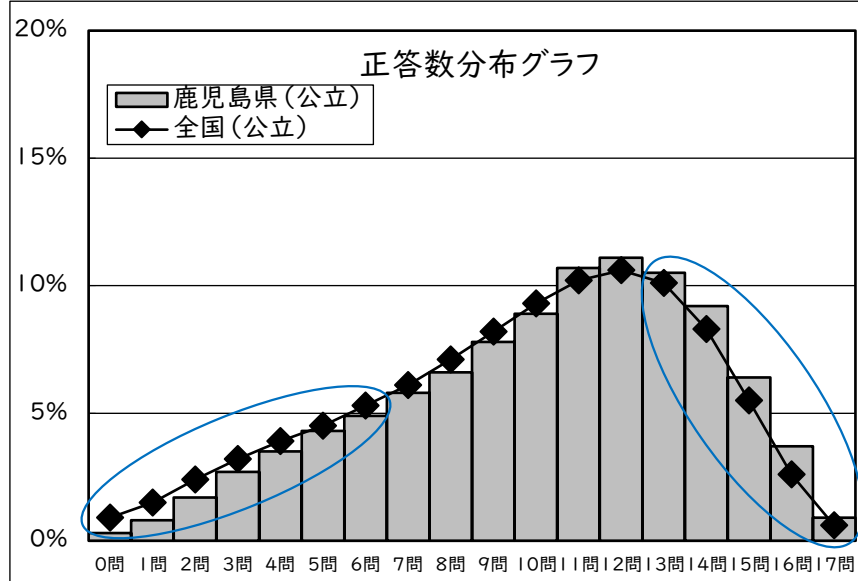
中学校数学に関する考察

本県の中学校数学では、平均正答率が全国と同様に低下傾向を示す中で、常に全国平均を下回る状況が続いています。特に、上位層の割合が全国より少なく、下位層が多い傾向が継続しており、学力分布の下方への広がりが見られます。観点別では、「知識・技能」は依然として全国を下回る水準で推移しているものの全国との差は縮小しており、改善の兆しが見られます。一方で、「思考・判断・表現」は大きく低下し、全国との差も拡大傾向にあり、数学的な見方・考え方を働かせて、事象を数量や図形の関係として捉え、筋道立てて考察・表現する力の定着に課題が見られます。領域別では、「データの活用」領域で、全国との差が縮小しており、日常生活に関わる課題を通して考察する学習の成果が表われています。一方、「数と式」や「図形」では、全国との差が拡大しており、これらの領域において論理的に思考する力や問題解決能力の向上が課題となります。

今後は、単元全体でどの資質・能力を身に付けるのかを明確にするとともに、学びの過程でどのように数学的な見方・考え方を働かせるかを意識して単元における指導をデザインすることが必要です。また、生徒が問いをもち、問題解決の過程で自ら考えたり、他者と協働したりすることで、基礎的な概念の理解を深め、思考力、判断力、表現力等を高めることができるように授業改善に取り組むことが求められます。

メモ

(5) 小学校理科



	鹿児島県	全国
中央値	11.0	10.0
最頻値	12.0	12.0
標準偏差	3.7	3.8

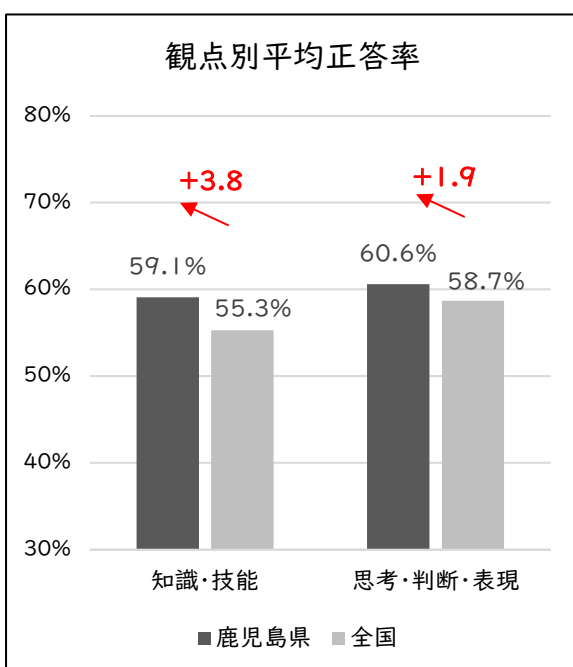
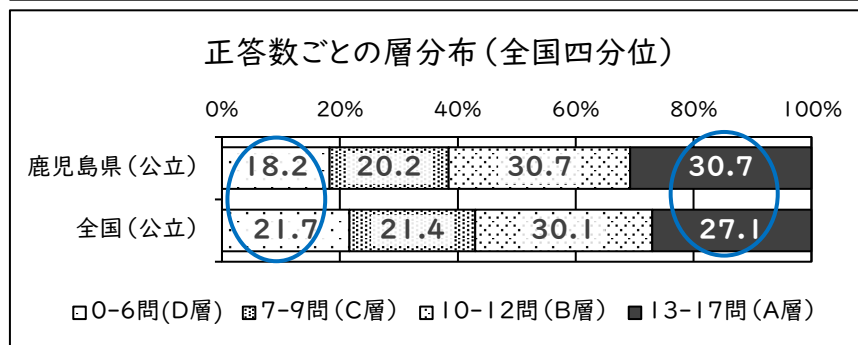
A 層(上位層)の割合が全国より高い。

[本県 30.7%, 全国27.1%
(全国との差 +3.6ポイント)]

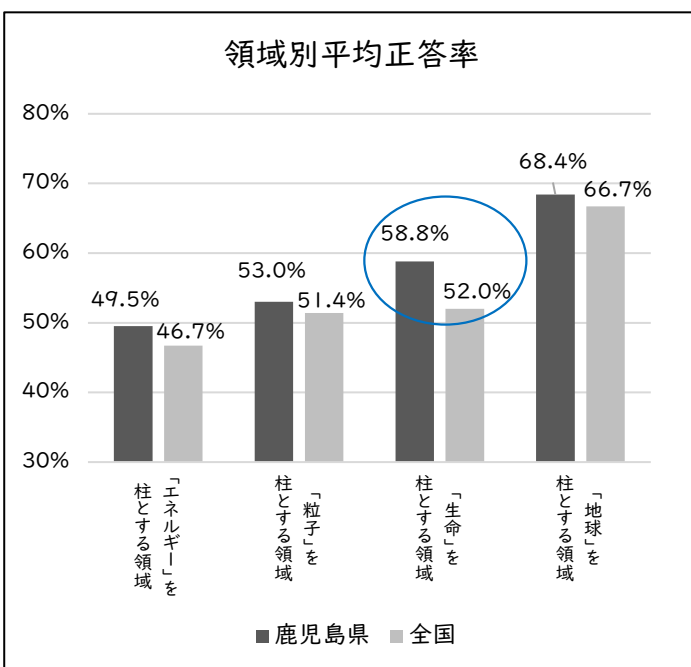
D 層(下位層)の割合は全国より低い。

[本県 18.2% 全国 21.7%
(全国との差 -3.5ポイント)]

正答数分布グラフを見ると、D 層の中でも特に正答数の少ない層の割合が全国より低いことが分かる。



「知識・技能」は、全国平均正答率との差+3.8ポイント、「思考・判断・表現」は、全国平均正答率との差が+1.9ポイントとなり、どちらの観点においても全国平均正答率を上回っている。

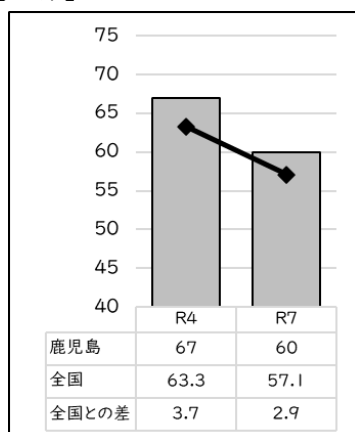


全ての領域において、全国平均正答率を上回っている。特に、「『生命』を柱とする領域」では、全国平均正答率との差が+6.8ポイントとなり、大きく上回っている。

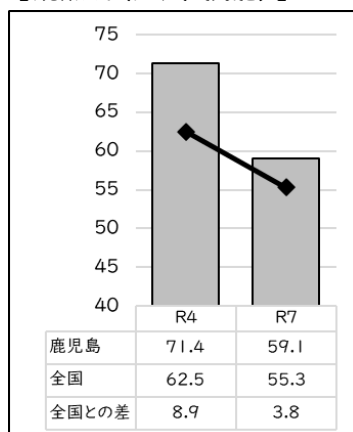
平均正答率の推移

■ 鹿児島県（公立） ◆ 全国（公立）

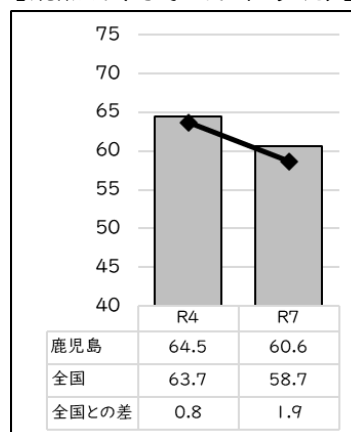
【全体】



【観点別（知識・技能）】

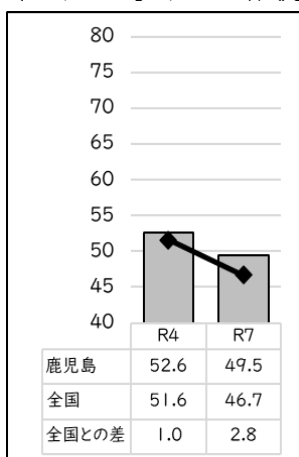


【観点別（思考・判断・表現）】



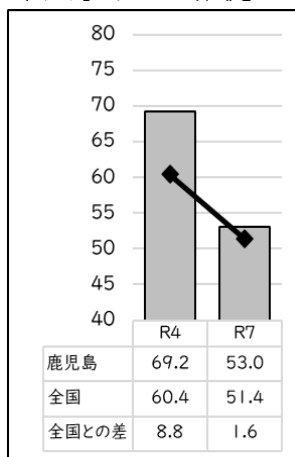
【領域別

（「エネルギー」を柱とする領域）】



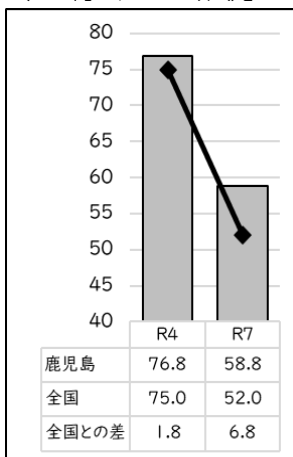
【領域別

（「粒子」を柱とする領域）】



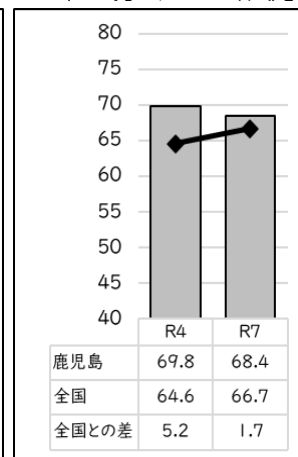
【領域別

（「生命」を柱とする領域）】



【領域別

（「地球」を柱とする領域）】



- 前回調査に引き続いて、全国の平均正答率を上回る結果となっている。
- 観点別に見ると、「知識・技能」は全国の平均正答率を大きく上回る結果となっている。「思考・判断・表現」も前回調査に引き続き全国の平均正答率を上回る結果となっている。
- 領域別に見ると、すべての領域で全国の平均正答率を上回っている。特に、「生命」を柱とする領域は全国を大きく上回り、その差が拡大している。

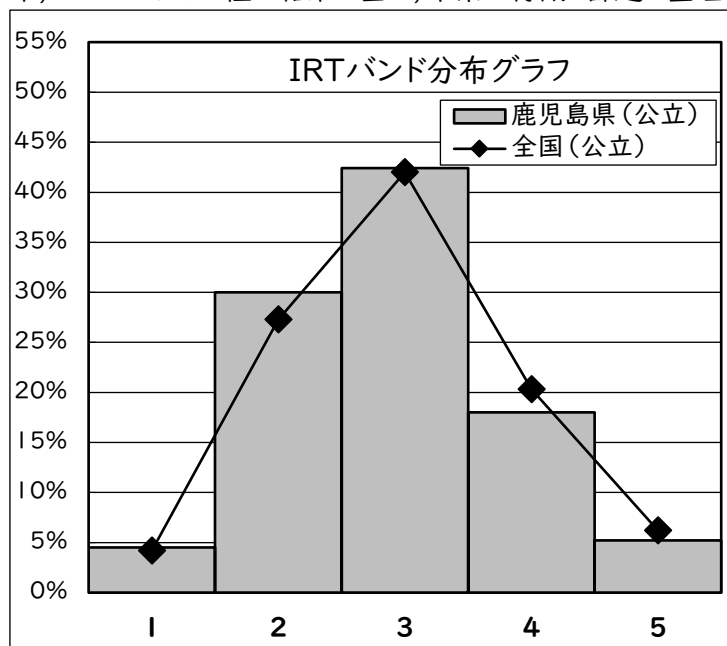
小学校理科に関する考察

本県の小学校理科は、平均正答率が全国の平均を上回り、前回調査（令和4年度）に引き続いて良好な結果となっています。また、全国と比べ、上位層の割合は高く、下位層の割合は低いことから、中下位層の学力向上が効果的に進み、全体として学力の底上げが図られていると考えられます。観点別では、全国の平均正答率の差が「知識・技能」で+3.8ポイント、「思考・判断・表現」で+1.9ポイントとなっており、知識及び技能の定着と、それを活用して思考、判断、表現する力の育成の両面で一定の成果が見られます。領域別では、全ての領域で全国平均を上回っています。特に、「『生命』を柱とする領域」では、全国を大きく上回り、身近な生物の観察や体験的な学習を通して基礎的・基本的事項の定着がなされていることがうかがえます。

引き続き、単元など内容や時間のまとまりを見通して、主体的・対話的で深い学びの実現を図るために、「どの場面・過程において、どのような理科の見方・考え方を働かせるか」を視点に授業デザイン、授業改善を継続していく必要があります。

(6) 中学校理科

中学校理科については、CBT調査によりIRTスコア、IRTバンドでの結果公表となっているため、平均正答率や層分布など、他の教科と同一指標での分析は行っていない。以下では、IRTスコア及びIRTバンドの分布、パーセンタイル値の結果を基に、本県の特徴と課題を整理する。



【IRTスコア】

平均値	493	503
標準偏差	121.7	124.0

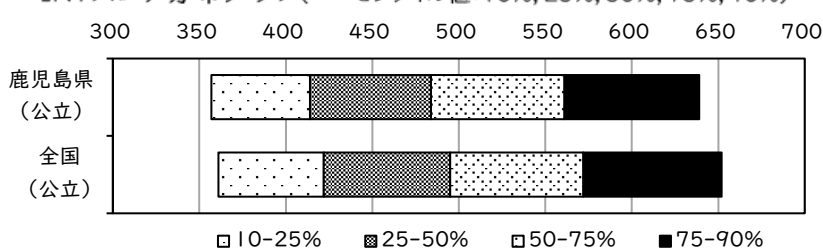
IRTバンド	割合(%)		
	鹿児島県	全国	差
5	5.2	6.2	-1.0
4	18.0	20.3	-2.3
3	42.4	42.0	0.4
2	30.0	27.3	2.7
1	4.5	4.2	0.3

IRTスコアの平均は、全国より10低い。
また、IRTバンドの分布状況から、IRTバンド4,5(上位層)に該当する生徒の割合が低く、IRTバンド2(下位層)に該当する生徒の割合は高い。

【パーセンタイル値】

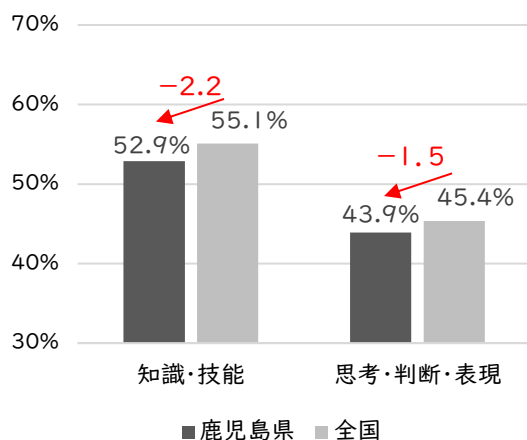
	鹿児島県	全国	差
10%	357	361	-4
25%	414	422	-8
50%(中央値)	484	495	-11
90%	639	652	-13

IRTスコア分布グラフ(パーセンタイル値:10%,25%,50%,75%,90%)

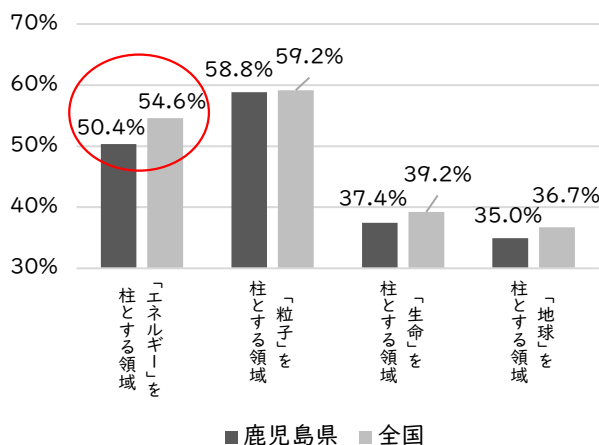


パーセンタイル値はすべて全国より小さく、IRTスコアは全体的に全国より低い傾向にある。

公開問題における観点別平均正答率



公開問題における領域別平均正答率



※ 観点別平均正答率、領域別平均正答率については、公表結果(正答率及び対象者数)を基に独自に算出

全国との平均正答率との差は、「知識・技能」が-2.2ポイント、「思考・判断・表現」が-1.5ポイントとなり、どちらの観点においても全国の平均正答率を下回っている。

全ての領域において、全国との平均正答率を下回っている。特に、「『エネルギー』を柱とする領域」では、全国との平均正答率との差が-4.2ポイントとなっており、課題が見られる。

中学校理科に関する考察

本県の中学校理科は、IRTスコアの平均値が493で、全国（503）を10下回っています。IRTバンドの分布状況を見ると、上位層に当たるIRTバンド4・5の割合が全国より低く、下位層（IRTバンド2）の割合が全国より高くなっています。これにより、全体として全国を下回る傾向が見られます。パーセンタイル値でも全ての指標で全国を下回っており、中央値（50％値）は全国より11ポイント低い状況にあります。

公開問題に基づく観点別の結果では、知識・技能で全国比-2.2ポイント、「思考・判断・表現」で-1.5ポイントと、いずれも全国を下回っています。領域別でも全ての領域で全国平均を下回り、特に「『エネルギー』を柱とする領域」では、全国との差が-4.2ポイントと大きく、課題が見られます。

今後は、単元全体を見通した「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、生徒の実態に応じて、基礎的・基本的事項の定着を図りつつ、「理科の見方・考え方」を適宜働かせる授業デザイン、授業改善を継続していく必要があります。

コラム

IRTとは何か？

IRTとは、国際的な学力調査（PISA、TIMSS）や英語資格・検定試験（TOEIC・TOEFL など）で採用されているテスト理論です。この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較できます。

IRT (Item Response Theory: 項目反応理論)

児童生徒の正答・誤答が問題の特性（難易度、測定精度）によるものか、児童生徒の学力によるのかを区分して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論

IRTに基づく調査のイメージ

視力検査を例としたイメージ

※イメージを表すことを目的として作成したため、示された7つのランドルト環の大きさ（難しさ）がAさんとBさんと異なっている。

	素点方式（正答数・正答率）	IRT方式
得点(スコア)の表現方法	何個のランドルト環（C） を見ることができたか	どの大きさのランドルト環（C） を安定的に見ることができたか
得点(スコア)の例	 Aさん Bさん	 Aさん Bさん

素点方式の場合は、Aさんの方が正答数（見ることができたランドルト環の数）・正答率が高くなります。

IRT方式の場合は、Bさんの方がスコア（視力）が高くなります。

【令和7年度全国学力・学習状況調査「中学校理科」IRTを用いた結果返却について（文部科学省）より】

4 質問調査の結果概要

(1) 令和7年度児童生徒質問調査の結果（抜粋）

質問の概要 ※番号は本報告書における質問番号	小学校			中学校		
	県平均	全国平均	差	県平均	全国平均	差
主体的・対話的で深い学びに関する質問						
① 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた	25.8	29.0	-3.2	19.9	23.4	-3.5
② 授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた	35.7	34.4	1.3	19.4	22.1	-2.7
③ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている	39.4	40.9	-1.5	31.7	35.1	-3.4
④ 授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う	34.6	35.5	-0.9	21.6	23.5	-1.9
⑤ 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる	47.6	49.9	-2.3	42.2	45.5	-3.3
ICTを活用した学習状況に関する質問						
⑥ 授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、ほぼ毎日使用した	60.0	46.7	13.3	52.3	53.2	-0.9
各教科の授業に関する質問						
⑦ 国語の授業の内容はよく分かる	82.2	82.8	-0.6	75.1	77.0	-1.9
⑧ 算数(数学)の授業の内容はよく分かる	78.5	78.3	0.2	69.4	70.3	-0.9
⑨ 理科の授業の内容はよく分かる	88.2	88.9	-0.7	69.7	71.4	-1.7
学習習慣に関する質問						
⑩ 学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたり1時間以上学習している	60.6	54.0	6.6	60.0	61.6	-1.6
自己有用感等に関する質問						
⑪ 自分には、よいところがあると思う	40.4	47.3	-6.9	34.1	40.7	-6.6
⑫ 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う	50.8	55.3	-4.5	40.0	46.6	-6.6
⑬ 学校に行くのは楽しいと思う	53.3	49.9	3.4	48.9	45.6	3.3
主体的な学習の調整に関する質問						
⑭ 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている	31.2	32.6	-1.4	25.1	27.4	-2.3
⑮ 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている	31.4	31.2	0.2	21.7	23.0	-1.3

※ 数値は「当てはまる」と回答した児童生徒の割合。（選択肢で最も肯定的な回答の割合）

ただし、⑦～⑨については、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合

※ ①、②、④～⑩は、小学校は「5年生までに受けた授業」、中学校は「1・2年生の時に受けた授業」について回答

- 「主体的・対話的で深い学び」に関する質問では、ほとんどの項目において全国を下回っています。特に、中学校においては、「課題の解決に向けて自分で考えて取り組む」「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている」の項目で、全国との差が3ポイント以上低くなっており、「主体的・対話的で深い学び」の実現に課題が残ります。
- 「授業でICT機器をはほぼ毎日使用している」と回答した児童生徒の割合は、小学校は全国を大きく上回っているものの、中学校はわずかに全国を下回っています。
- 「自分にはよいところがある」「先生は自分のよいところを認めてくれている」と感じる児童生徒の割合は全国より5ポイント以上低い状況にありますが、小・中学校ともに、「学校に行くことは楽しいと思う」と感じる児童生徒の割合は、全国より3ポイント以上高くなっています。このことから、学校生活全体への肯定感は比較的高いことがうかがえます。
- 普段（月曜日から金曜日）、学校の授業以外に1日当たり1時間以上学習している児童生徒の割合が、小学校では全国を上回るものの、中学校では下回っています。
- 「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫する」「学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができる」といった、主体的な学習の調整に関する質問に対しては、全国と同等か、下回る結果となっています。このことから、学びのプロセスを見通したり、学んだことを振り返ったりする活動を取り入れるなど、主体的な学習の調整につながる授業改善を推進していくことが必要です。

コラム

「自己肯定感」の低さは謙遜によるものなのか？

本県の児童生徒は、全国と比べると「自分にはよいところがあると思う」と回答した児童生徒の割合は、低い状況が続いています。この結果が謙遜の傾向によるものか、実際に自己を肯定的に捉えられていないためかを明らかにするため、関連する質問項目とのクロス集計を行い、児童生徒の自己理解や他者からの承認の実感との関係を分析しました。

【「自分にはよいところがあると思う」×「先生はあなたのよいところを認めてくれる」の回答項目別児童生徒の割合】

【小学校】 ※ 単位は%		先生はあなたのよいところを褒めてくれる			
		1	2	3	4
自分にはよいところがある	1	29.5	9.6	0.8	0.4
	2	18.4	23.4	2.5	0.3
	3	2.1	5.8	2.4	0.4
	4	0.8	1.7	0.9	0.9

【中学校】 ※ 単位は%		先生はあなたのよいところを褒めてくれる			
		1	2	3	4
自分にはよいところがある	1	23.3	9.7	0.8	0.3
	2	14.5	33.3	2.2	0.3
	3	1.8	7.2	2.8	0.3
	4	0.4	1.3	0.9	0.7

1…当てはまる 2…どちらかと言えば、当てはまる 3…どちらかと言えば、当てはまらない 4…当てはまらない

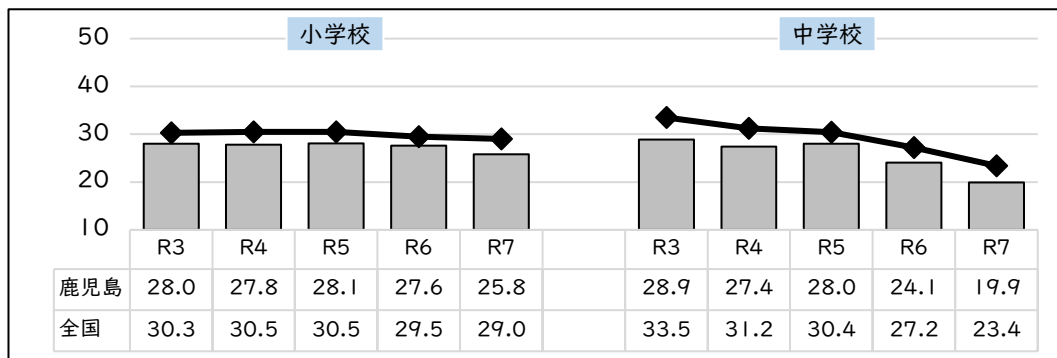
上の表から、「教師から認めてもらえる」と感じている児童生徒ほど、自分のよさを実感している割合が高い傾向がみられました。一方で、「教師から認めてもらえる」と感じていても、「自分にはよいところがある」と答えない児童生徒も一定数存在しました。しかしながら、その割合は1%未満であり、自己肯定感の低さは、文化的な謙遜意識によるものというよりも、児童生徒自身が自らのよさを実感する経験不足に起因している可能性が高いと考えられます。

(2) 児童生徒質問経年推移（抜粋）

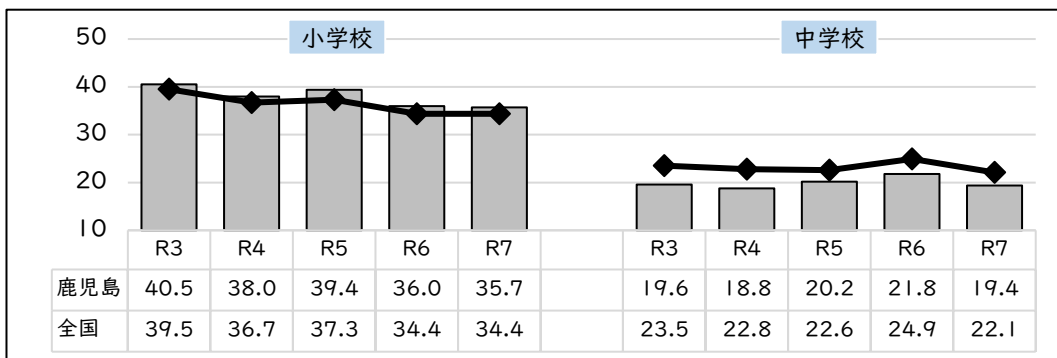
質問調査の結果について、経年的な変化を比較することで、児童生徒の学びに向かう姿勢や学習習慣、自己有用感の状況を把握することができます。ここでは、令和3年度から令和7年度までの結果を基に、主として授業での取組や学習習慣、自己有用感、主体的な学習の調整に関する傾向を分析し、児童生徒の意識や行動の変化を捉えることにします。

■ 鹿児島県（公立） ◆ 全国（公立）

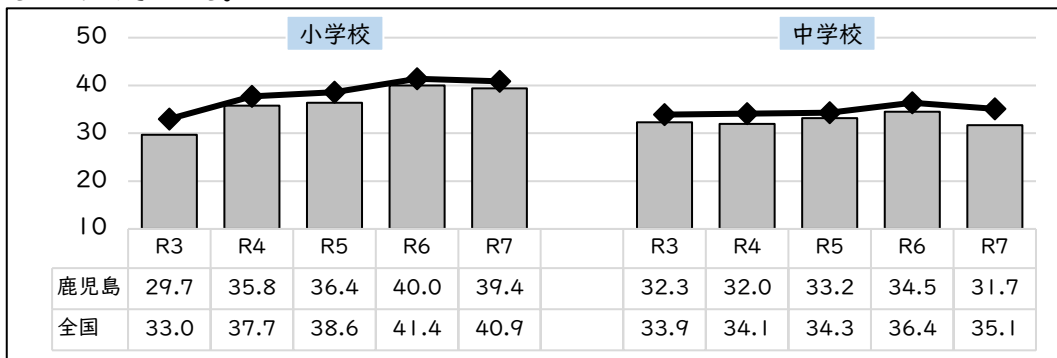
① 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。



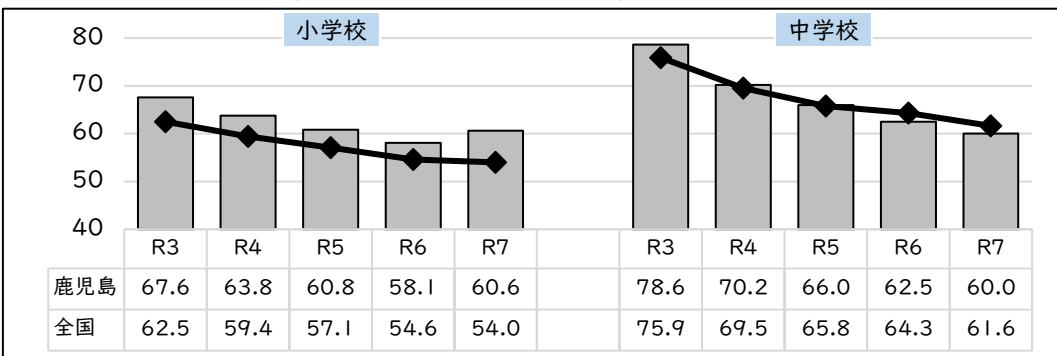
② 授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた。



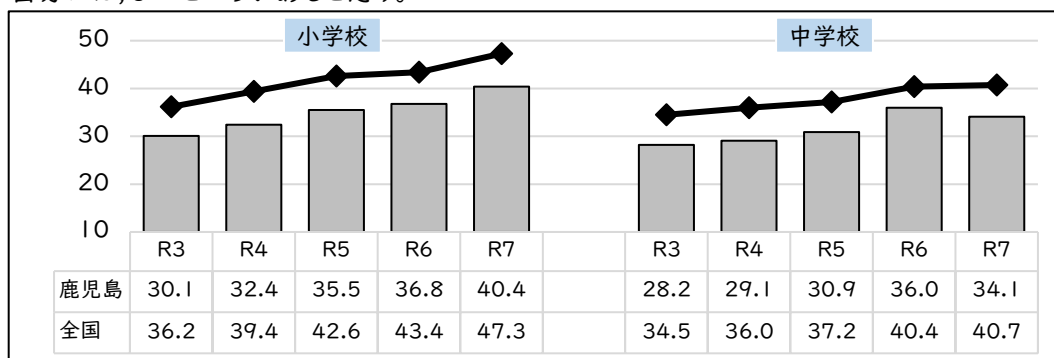
③ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている。



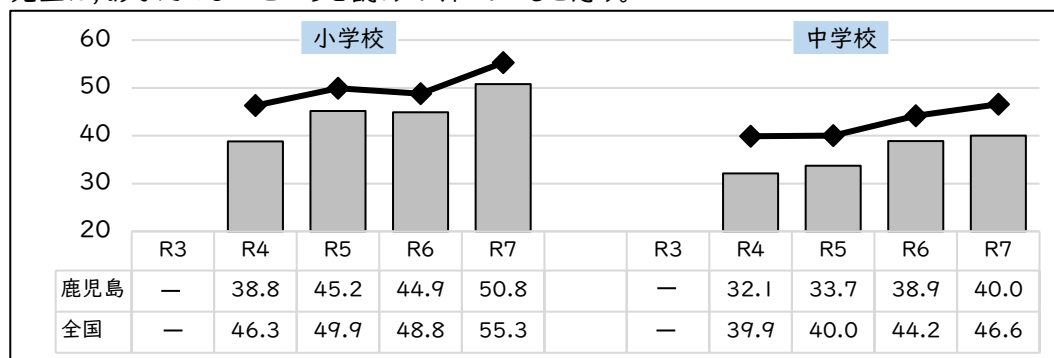
⑩ 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日あたり1時間以上学習している。



⑪ 自分には、よいところがあると思う。

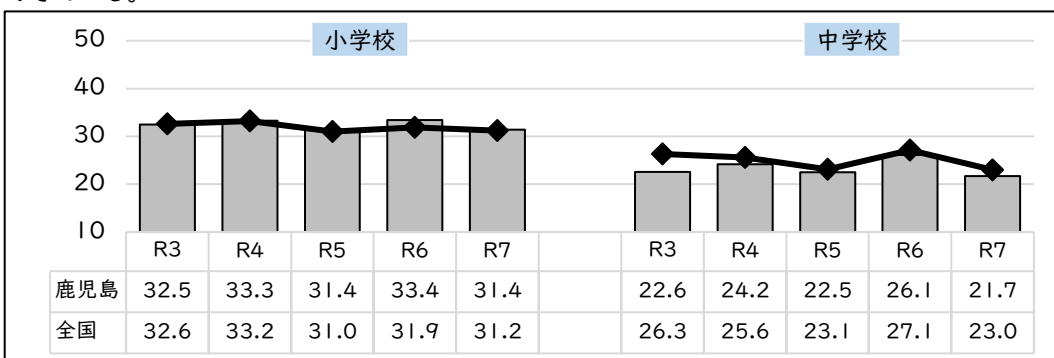


⑫ 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う。



※ 令和3年度調査では、この内容の質問はなかった。

⑮ 学習した内容について、分かった点やよく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている。



- ①から、小中学校ともに主体的に学んでいると回答している児童生徒の割合は、全国を下回っています。小学校では、全国を下回りながらも横ばいで推移しているのに対し、中学校は減少傾向が見られ、主体的な学びの実現に課題があります。また、②から、授業の内容が自分に合っていると感じている児童生徒の割合は、小学校では全国と同等か上回る結果で推移しているのに対し、中学校では全国を下回る結果で推移しており、その割合も小学校より低い傾向にあります。このことから、中学校において、個別最適な学びのより一層の充実の必要があります。
- ⑩から授業以外での学習時間については、小中学校ともに低下傾向にあるものの、小学校では全国より高い水準で推移しているのに対し、中学校では、令和3年度から令和7年度にかけて全国比+2.7%から-1.6%になっており、全国より大幅に減少する傾向にあり、学習時間の確保が課題となっています。
- ⑪、⑫から、自己肯定感を感じている児童生徒の割合や教師から認められていていると感じている児童生徒の割合は、増加傾向にあるものの、依然として全国平均を下回っており、自己肯定感の向上につながる取組の充実が求められます。
- ⑮から、主体的な学習の調整については、小学校は全国と同水準で推移しているのに対し、中学校では全国を下回る結果で推移しており、学びに向かう力の育成に向けた指導の工夫が求められます。

(3) 同一集団における回答状況の比較

経年推移の結果から、児童生徒の学びに向かう姿勢や学習習慣、自己有用感などにおいて、校種による特徴や変化の傾向が明らかになりました。これらの傾向を踏まえ、本項では、同一集団における小学校6年時（令和4年度調査）と中学校3年時（令和7年度調査）の結果を比較し、児童生徒の意識や行動の変容を考察します。

【中学校3年生の小学校6年生時（令和4年調査）との比較】

質問の概要 ※番号は本報告書における質問番号	県平均			全国平均		
	小6時 (R4)	中3時 (R7)	差 R7-R4	小6時 (R4)	中3時 (R7)	差 R7-R4
主体的・対話的で深い学びに関する質問						
① 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた	27.8	19.9	-7.9	30.5	23.4	-7.1
② 授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた	38.0	19.4	-18.6	36.7	22.1	-14.6
③ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている	35.8	31.7	-4.1	37.7	35.1	-2.6
④ 授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う	-	21.6	-	-	23.5	-
⑤ 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる	-	42.2	-	-	45.5	-
ICTを活用した学習状況に関する質問						
⑥ 授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、ほぼ毎日使用した	25.7	52.3	26.6	26.7	53.2	26.5
各教科の授業に関する質問						
⑦ 国語の授業の内容はよく分かる	81.2	75.1	-6.1	84.0	77.0	-7.0
⑧ 算数(数学)の授業の内容はよく分かる	80.9	69.4	-11.5	81.2	70.3	-10.9
⑨ 理科の授業の内容はよく分かる	85.8	69.7	-16.1	88.5	71.4	-17.1
学習習慣に関する質問						
⑩ 学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたり1時間以上学習している	63.8	60.0	-3.8	59.4	61.6	2.2
自己有用感等に関する質問						
⑪ 自分には、よいところがあると思う	32.4	34.1	1.7	39.4	40.7	1.3
⑫ 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う	38.8	40.0	1.2	46.3	46.6	0.3
⑬ 学校に行くのは楽しいと思う	54.1	48.9	-5.2	51.7	45.6	-6.1
主体的な学習の調整に関する質問						
⑭ 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている	-	25.1	-	-	27.4	-
⑮ 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている	33.3	21.7	-11.6	33.2	23.0	-10.2

※ 数値は「当てはまる」と回答した児童生徒の割合。（選択肢で最も肯定的な回答の割合）

ただし、⑦～⑨については、「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合

- 「主体的・対話的で深い学び」に関する肯定的回答が全般的に減少しており、全国と比べて減少率も大きくなっています。特に、「自分で考え、自分から取り組む」「自分に合った学び方ができていた」と感じる生徒の割合の低下が顕著であり、学習内容の高度化や学校生活の変化に伴って、学びの主体性を維持することの難しさが示唆されます。
- 「授業で ICT 機器をほぼ毎日使用している」と回答した生徒の割合は、小学校6年時より大幅に増加しており、ICT 機器の活用が図られています。一方で前述のように、主体的・対話的で深い学びの実感は低下していることから、ICT 機器の活用が学びの質の向上や主体性の発揮につながっていない実態がうかがえ、ICT 機器を学びの可視化や自己調整につながるように活用することに課題が残ります。
- 授業時間以外に、1日あたり1時間以上学習している生徒の割合は、全国は増加しているのに対し、本県の生徒は減少しています。これは、学びを自ら継続する意識や家庭学習を通して課題に向かう習慣が十分に形成されていないことの可能性を示しています。
- 「自分にはよいところがある」「先生が認めてくれる」といった自己有用感に関する質問に対して、「当てはまる」と回答した生徒の割合は、小学校6年時よりも増加しており、その上昇率も全国より大きい傾向にあり、教師の働きかけや学校風土の改善が一定の成果を上げていると考えられます。
- 「学習を見直し次につなげる」など、学びを自己調整する力に関する項目は、大きく低下しており、目標設定や振り返りを通して学習を自己管理する力の育成には課題が残ります。

メモ

5 クロス集計による結果概要及び分析

(1) 学力調査との相関

本項では、どのような取組が学力向上につながるのかを把握するため、学力調査と児童生徒質問調査の相関について、相関係数を基に分析します。

ア 学力調査と質問調査の相関係数

下の表は、学力調査の結果と児童生徒質問調査における当該教科に対する意識との相関係数を表したものです。

相関係数を r とするとき、次のように見なします。

- ・ $0.2 \leq r < 0.4$ ならば、弱い正の相関（○）がある。
- ・ $0.4 \leq r < 0.7$ ならば、正の相関（◎）がある。

〔表1〕 学力調査と質問調査の相関係数（抜粋）

	小学校			中学校		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
当該教科の勉強が得意	0.21 ○	0.47 ◎	0.23 ○	0.21 ○	0.44 ◎	0.35 ○
当該教科の勉強が好き	0.13	0.35 ○	0.18	0.14	0.38 ○	0.32 ○
当該教科の授業の内容はよく分かる	0.23 ○	0.43 ◎	0.24 ○	0.21 ○	0.41 ◎	0.27 ○
当該教科で学習したことは、将来役に立つと思う	0.16	0.21 ○	0.14	0.12	0.12	0.29 ○

- すべての教科において、「当該教科の勉強が得意」及び「当該教科の授業の内容はよく分かる」との回答と学力調査の結果との間には、正の相関もしくは弱い正の相関が見られます。特に、算数・数学では相関係数が高く、理解度や教科の学習に対する「自信の高さ」が、学力の向上に強く関係していることが示唆されます。
- 「教科の学習が将来役に立つと思う」という意識にも一定の関連が見られ、学びの価値付けも学力の向上に影響していると考えられます。

(2) 授業理解と学び方の関係

前項から、「当該教科の授業がよく分かる」と回答した児童生徒ほど学力調査の結果がよいことが分かりました。そこで、本項では、「授業がよく分かる」と回答した児童生徒がどのような学び方をしているのかを把握するため、学び方に関する質問項目との相関関係を調べました。

下の表は、特に相関係数が高かった項目について、教科ごとの相関係数を挙げたものです。

〔表2〕「当該教科の授業がよく分かる」と学び方に関する質問との相関係数

	小学校			中学校		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
① 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ	0.34 ○	0.35 ○	0.27 ○	0.26 ○	0.31 ○	0.25 ○
② 授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていた	0.33 ○	0.31 ○	0.26 ○	0.25 ○	0.29 ○	0.22 ○
③ 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている	0.32 ○	0.26 ○	0.24 ○	0.22 ○	0.18	0.18
④ 授業で学んだことを次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思う	0.31 ○	0.30 ○	0.25 ○	0.23 ○	0.23 ○	0.21 ○
⑤ 授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいる	0.31 ○	0.25 ○	0.24 ○	0.22 ○	0.19	0.16
④ 分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができている	0.31 ○	0.33 ○	0.24 ○	0.22 ○	0.29 ○	0.23 ○
⑤ 学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている	0.33 ○	0.36 ○	0.27 ○	0.24 ○	0.31 ○	0.22 ○

○ いずれの教科においても、「①課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ（主体的な学び）」、「④分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができ（主体的な学習の調整）」、「⑤学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点等を見直し、次の学習につなげることができ（主体的な学習の調整）」との相関係数が比較的高く、授業の理解度との関連が強いことが分かります。

○ このことから、主体的・対話的で深い学びの実現のために授業改善に取り組むこと、児童生徒が主体的に学習を調整することができるようにすることが求められます。

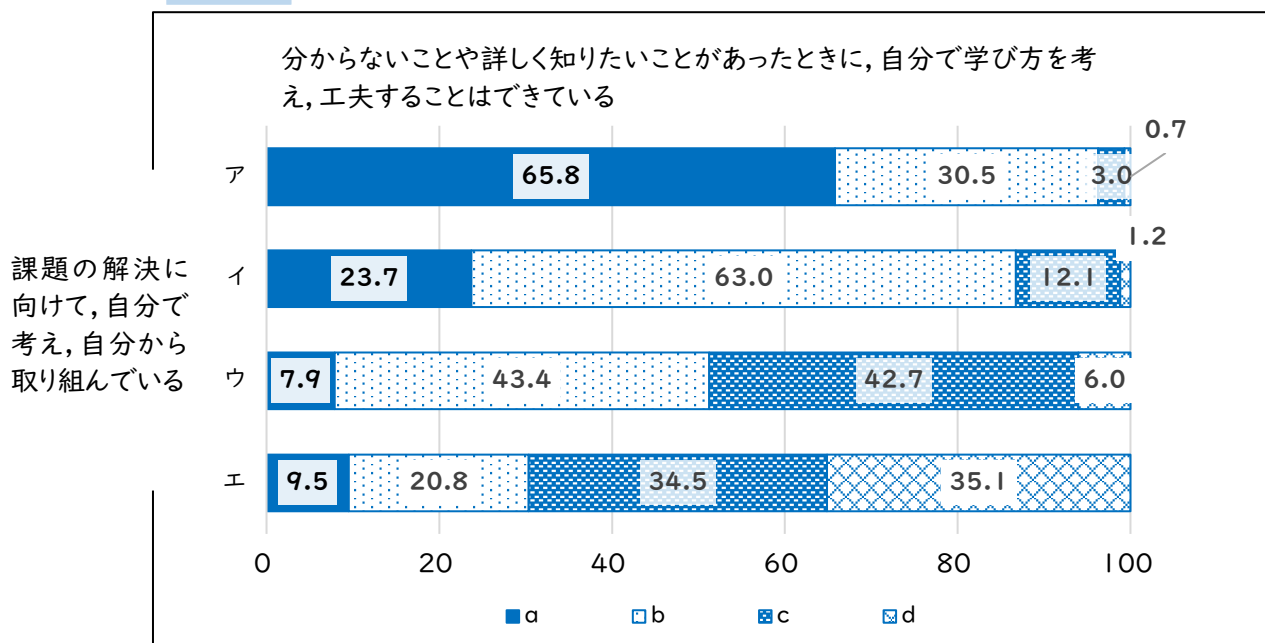
(3) 「主体的・対話的で深い学び」と「主体的な学習の調整」の関係

これまでの分析で、「主体的・対話的で深い学び」や「主体的な学習の調整」が学力や授業の理解に関係していることが明らかになりました。本項では、これらの2つの要素がどのように関連し合っているかに着目し、児童生徒の学びの質を構造的に捉えることにします。

ア 「①主体的な学び」と「⑭主体的な学習の調整」

ア：当てはまる イ：どちらかといえば、当てはまる ウ：どちらかといえば、当てはまらない エ：当てはまらない
 a：当てはまる b：どちらかといえば、当てはまる c：どちらかといえば、当てはまらない d：当てはまらない

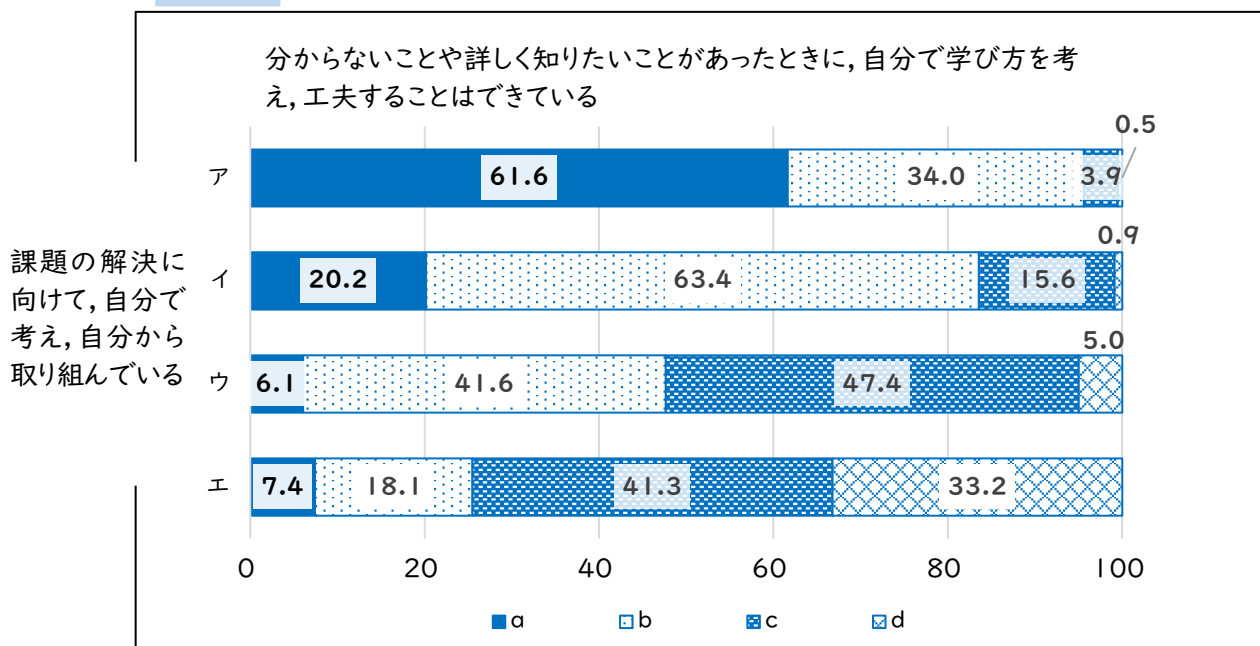
小学校 相関係数：0.52



※ グラフの見方

小学校の生徒質問調査において、「①課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」に「ア：当てはまる」と回答した児童の65.8%が、「⑭分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできる」に、「a：当てはまる」と回答している。

中学校 相関係数：0.48



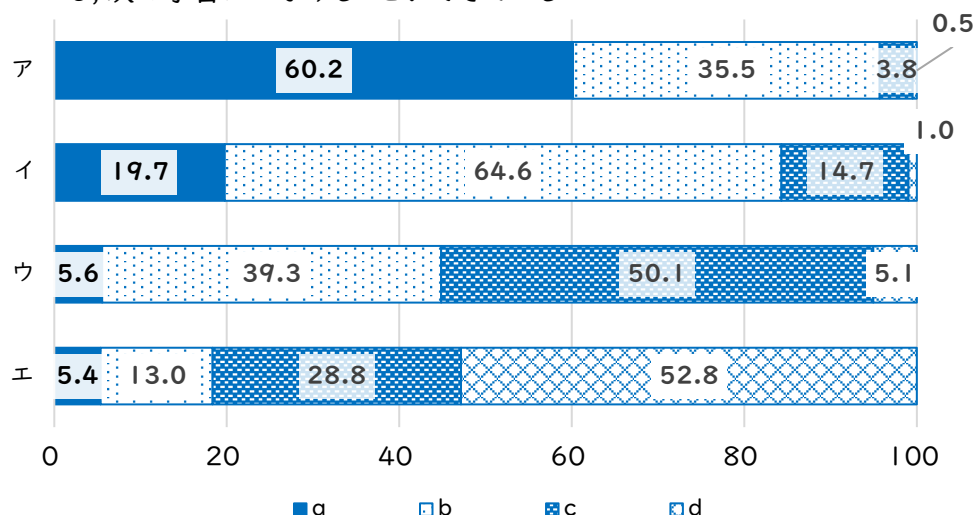
イ 「④深い学び」と「⑤主体的な学習の調整」

ア：当てはまる イ：どちらかといえば、当てはまる ウ：どちらかといえば、当てはまらない エ：当てはまらない
 a：当てはまる b：どちらかといえば、当てはまる c：どちらかといえば、当てはまらない d：当てはまらない

小学校 相関係数：0.56

授業で学んだ
 ことを次の学
 習や実生活に
 結びつけて考
 えたり、生か
 したりするこ
 とができる
 と思う

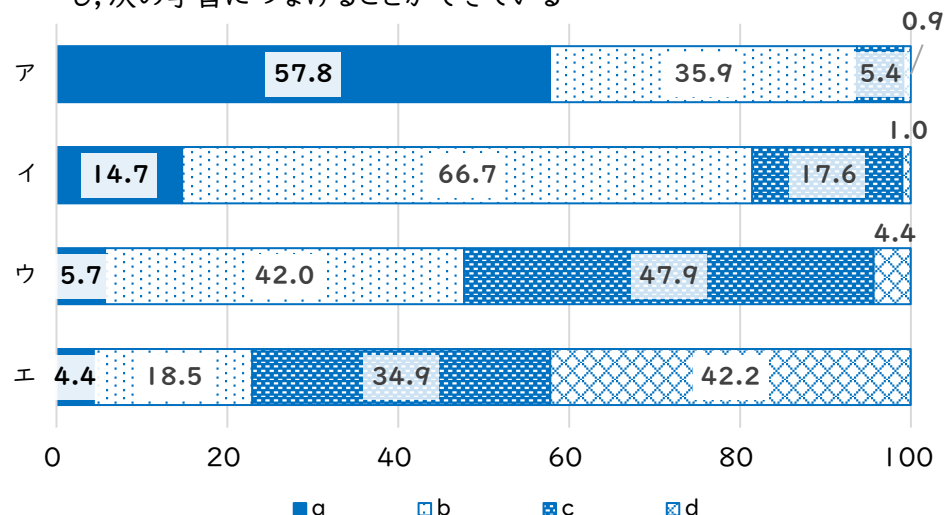
学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている



中学校 相関係数：0.52

授業で学んだ
 ことを次の学
 習や実生活に
 結びつけて考
 えたり、生か
 したりするこ
 とができる
 と思う

学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができている



- 「①課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組む（主体的な学び）」に肯定的に回答した児童生徒ほど、「④分からないことや詳しく知りたいことがあったときに自分で学び方を考え、工夫できている（主体的な学習の調整）」でも肯定的に答える割合が高く、両者の相関係数は小学校で0.52、中学校で0.48と正の相関が見られます。
- 「④授業で学んだことを次の学習や実生活に生かせると思う（深い学び）」に肯定的に回答した児童生徒ほど、「⑤学習した内容を振り返り、次の学習につなげている（主体的な学習の調整）」でも肯定的に答える割合が高く、両者の相関係数は小中学校ともに0.5を超え、正の相関が見られます。

- 他の「主体的・対話的で深い学び」に関する項目と「主体的な学習の調整」に関する項目との相関係数も 0.45 程度となっており、「主体的・対話的で深い学び」ができていないと実感できている児童生徒ほど、自らの学びを見通したり、振り返ったりしながら学習を調整する力が高い傾向にあり、学習を調整する力が高い児童生徒ほど、授業の中で自ら課題に向かい、学んだことを生活や次の学習に生かしたりする傾向が見られます。
- つまり、学びを自分事として捉え、他者との対話を通して考えを深める経験が、学びの自己調整を促し、自己調整が進むことで主体的・対話的で深い学びの実現がより確かなものになり、「主体的・対話的で深い学び」と「主体的な学習の調整」とが相互に関係しながら、児童生徒の学びの質が高まります。
- 今後は、児童生徒が自ら学びを調整することと、「主体的・対話的で深い学び」とを一体的に充実させていくことが必要になります。
- そのためには、児童生徒が自己選択・自己決定しながら、課題への見通しをもち、他者と協働しながら課題を解決し、学びの過程を振り返り次につなげる「学習者主体の授業」を実践していくことが大切です。
- 県教育委員会では、「学習者主体の授業」実現プロジェクトとして、学習者主体の授業へと授業改善に取り組んでいる学校での校内研修の支援を行っています。「学習者主体の授業」実現プロジェクトでは、プロジェクト実践モデル校区、プロジェクト実践校区を指定し、校内研修を契機として、学力向上に向けた組織的な支援をするとともに、指定校区の実践を県下に広げ、教科の枠を超えて教師一人一人が学び合い、子供たちの視点から議論し合うことによって、教師の授業力向上と児童生徒の学力向上に取り組んでいます。
- また、授業以外での活動においても主体的に学習を調整する力を育成するためには、家庭学習においても学習時間を確保するとともに、学習の質を向上することも大切になります。
- 県教育委員会では、「家庭学習マイゴールチャレンジ」を推進しています。これは、児童生徒が自ら目標や内容、進め方を決めて家庭学習に取り組むものであり、学習の振り返りや見通しの設定などを通して、自らの学習を調整する力を育む実践です。授業での取組を家庭学習へとつなげることで、学びの連続性が確保され、児童生徒の学びの自律化が一層促進されることが期待されます。

※ 参考資料

「学習者主体の授業」実践例



家庭学習マイゴールチャレンジ (MGC)



(4) 「主体的・対話的で深い学び」に関する児童生徒と教師の意識

本項では、児童生徒質問調査と学校質問調査との比較を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現や「主体的な学習の調整」に関する児童生徒と教師の認識を分析することにより、授業改善の方向性を考えていくことにします。

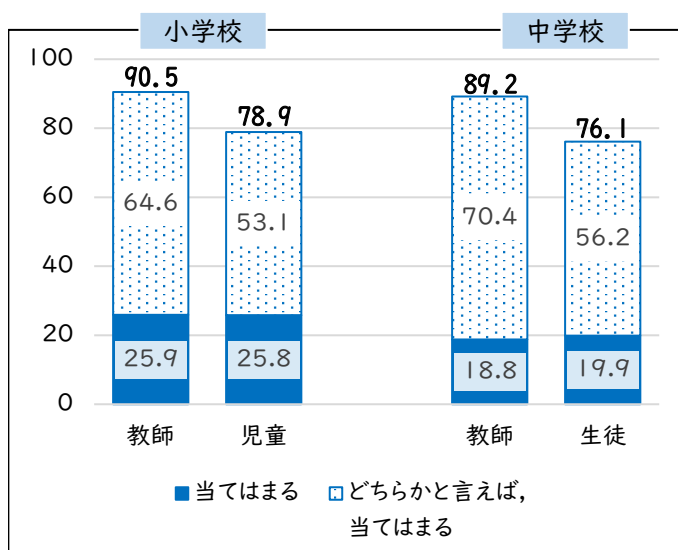
【主体的な学びについて】

学校質問の設問内容

調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか

児童生徒質問の設問内容

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか



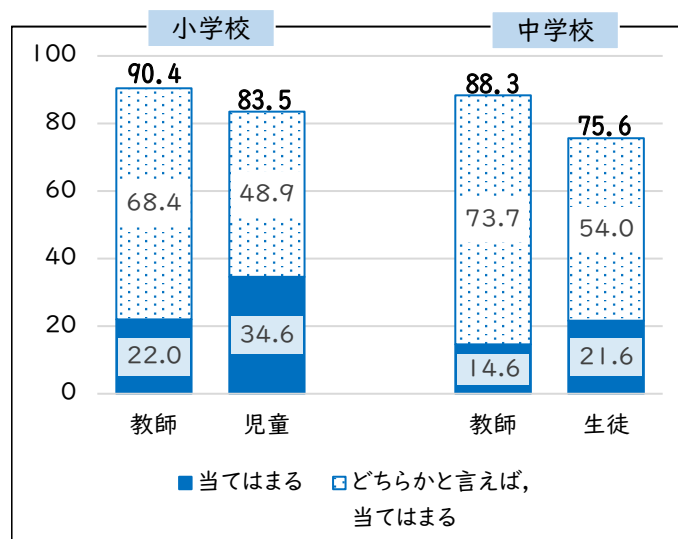
【深い学び】

学校質問の設問内容

調査対象学年の児童生徒に対して、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか

児童生徒質問の設問内容

授業で学んだことを、次の学習や実生活に結びつけて考えたり、生かしたりすることができると思いますか



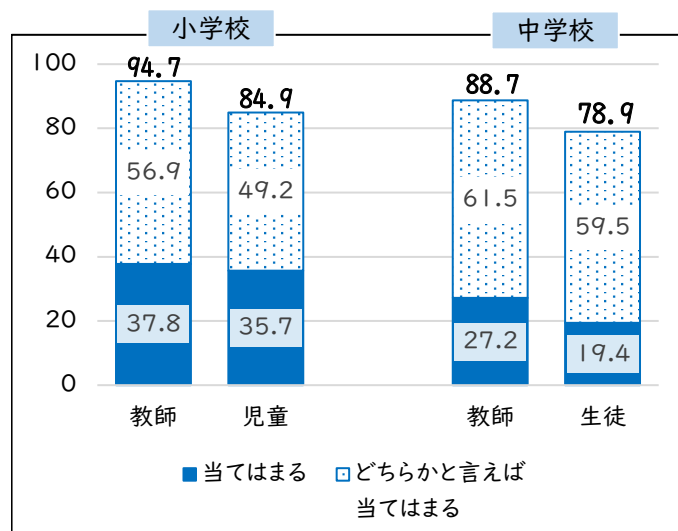
【個別最適な学び】

学校質問の設問内容

調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学習指導において、児童一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫しましたか

児童生徒質問の設問内容

これまでに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていましたか



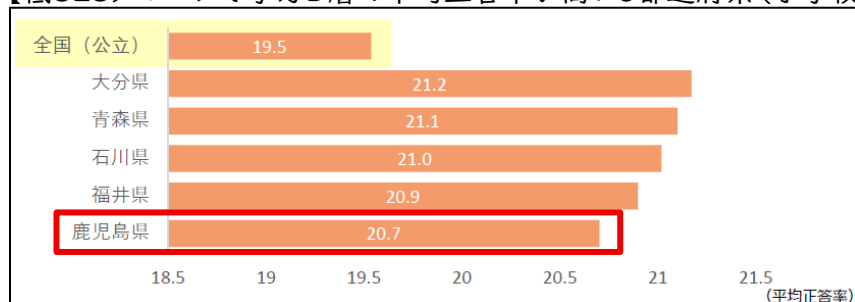
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に関する児童生徒と教師の認識には、一定の差が見られます。特に「課題の解決に向けて自分で考え、自分から取り組む」や「学習内容を生活や次の学習に生かす」といった項目では、教師の方が高く見積もる傾向にあり、児童生徒の実感との間にギャップが存在しています。このことは、授業者の意図した学びが、児童生徒にとって「主体的に学んでいる」という実感として十分に共有されていないことを示唆しています。
- 「個別最適な学び」に関しても、児童生徒と教師の認識に差がみられます。このことから、学習者一人一人の特性や状況に応じた学び方の工夫が十分に機能していない実態がうかがえます。
- これらの結果から、授業の中で児童生徒自身が「自分の考えで課題に向かっている」「仲間と協働して考えを深めている」と感じられる場面を意図的に設計することが求められます。
- 児童生徒が自らの学びを自覚し、主体的に取り組めるようにするためには、「学習者主体の授業」の実現が欠かせません。児童生徒が課題を発見し、見通しをもって試行錯誤し、振り返りを通して次の学びへとつなげていく過程を授業の中に位置付けることが、今後の授業改善の方向性として重要です。

コラム

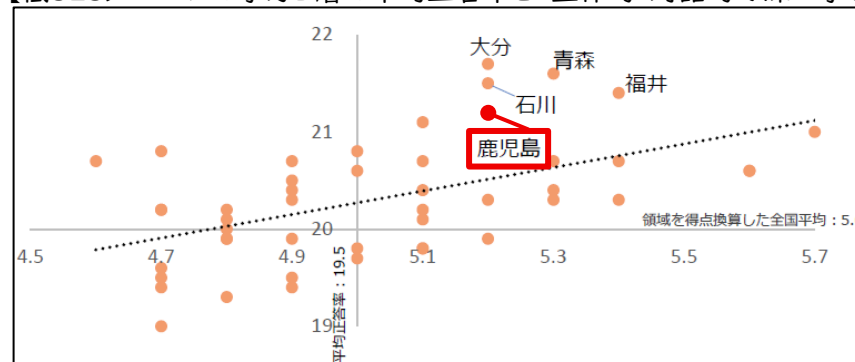
低SESグループでの学力層分布

令和7年度全国学力・学習状況調査でも、SESが低いグループほど各教科の正答率が低い傾向が見られました。特に算数・数学については、SESにより差が見られました。そのため、47都道府県それぞれのSESが低いグループを取り出した上で、各学力D層の割合や平均正答率を比較したところ、SESが低くても、学力D層の割合、平均正答率と主体的・対話的で深い学びの取組に一定の関係が見られました。

【低SESグループで学力D層の平均正答率が高い5都道府県(小学校算数)】



【低SESグループの学力D層の平均正答率と「主体的・対話的で深い学び」の回答状況(小学校算数)】



(令和7年度全国学力・学習状況調査結果公表3より)

本県小学校において、SES が低いグループにおける学力D層では、平均正答率が全国と比べて高く、「主体的・対話的で深い学び」を実感している割合も高い傾向にあります。このことから、「主体的・対話的で深い学び」が、下位層の学力向上に寄与していることが分かります。